阿蘇かずらかご

ASO KAZURAKAGO

武田計画室

平成２６年度　観光利用放牧地等整備調査業務報告書

阿蘇かずらかご

武田計画室

平成２６年度　観光利用放牧地等整備調査業務報告書

目次

1　イントロダクション・・・

1 イントロダクション

-50%

明治期には 44,000ha あった阿蘇の草原。
現在は 22,000ha にまで減少している。

1　イントロダクション

1-1) 背景

阿蘇地域振興デザインセンターは、阿蘇地域のあるべき姿を提示し、また実現していくことを目的として活動を続けてきました。本報告書では、阿蘇地域振興デザインセンターからの委託を受けた武田計画室が、主宰者の武田史朗が指導する立命館大学理工学部ランドスケープデザイン研究室のメンバーと共に行った 2014 年度の調査・デザイン活動の成果をとおして、今後の阿蘇のビジョンを検討するための方向性を提案します。

「阿蘇地域振興デザインセンター中期計画」によれば、阿蘇地域振興デザインセンターでは、「**豊な自然による世界ブランドの確立**」、「**地域の元気再生による地域力向上**」、「**広域連携による競争力のある観光地づくり**」を活動の三つの柱としています。つまり、環境の維持保全、地域社会の活性化、そして観光地としての成長です。本報告書はこの考えを受けつぎ、**環境の問題を、社会や文化の問題、そして産業の問題と不可分のものとして捉えます**。

阿蘇地域の大きな課題として、阿蘇の景観を特色づける「草原」の維持が困難になってきています。これは酪農の衰退という産業の問題と不可分です。一方で阿蘇では、観光業が新たに中心的な産業としての重要性を増してきています。この観光業が草原の維持に貢献する可能性は十分にあります。しかし地域住民や地域コミュニティが主体となって、特有の文化を発信していくことができなければ、これからの時代において観光業はたちゆかないと思われます。このように相互連関する問題系が、本報告書が取り組む課題となります。

1-2) 目的

本報告書が課題とするのは、１）阿蘇の自然環境、とくに草原の維持・保全、２）地域社会の活性化、３）観光地としての成長です。

本報告書の目的は、こうした課題にたいして次にようにアプローチすることです。まず､阿蘇の地域資源を巡って、武田計画室が立命館大学理工学部ランドスケープデザイン研究室の協力を得て行った調査の結果をまとめ、**阿蘇の地域資源にたいする見方**を示します。その上で、そうした地域資源を生かした今後のビジョンを構想するにあたって参考となる事例を紹介します。こうして、**阿蘇の可能性の「種」**を集めたうえで、**提案**を行います。提案においては、すでに一部において始まっているフットパスの検討を踏まえ、今後、阿蘇の皆さんが草原の維持・保全と結びついた、産業や文化のあり方についてのビジョンを検討される際に、有用と考えられる検討の方向性を提示しています。

提案においては、地域の計画を「作る」だけではなく、

その運営の主体となる**地域住民の間のネットワークを「育てる」**ことが重要と考えます。そのために本報告書が目指すのは、地域住民の議論の題材となり、地域住民が主体となって阿蘇のビジョンを生み出し実現していくための手がかりとなることです。

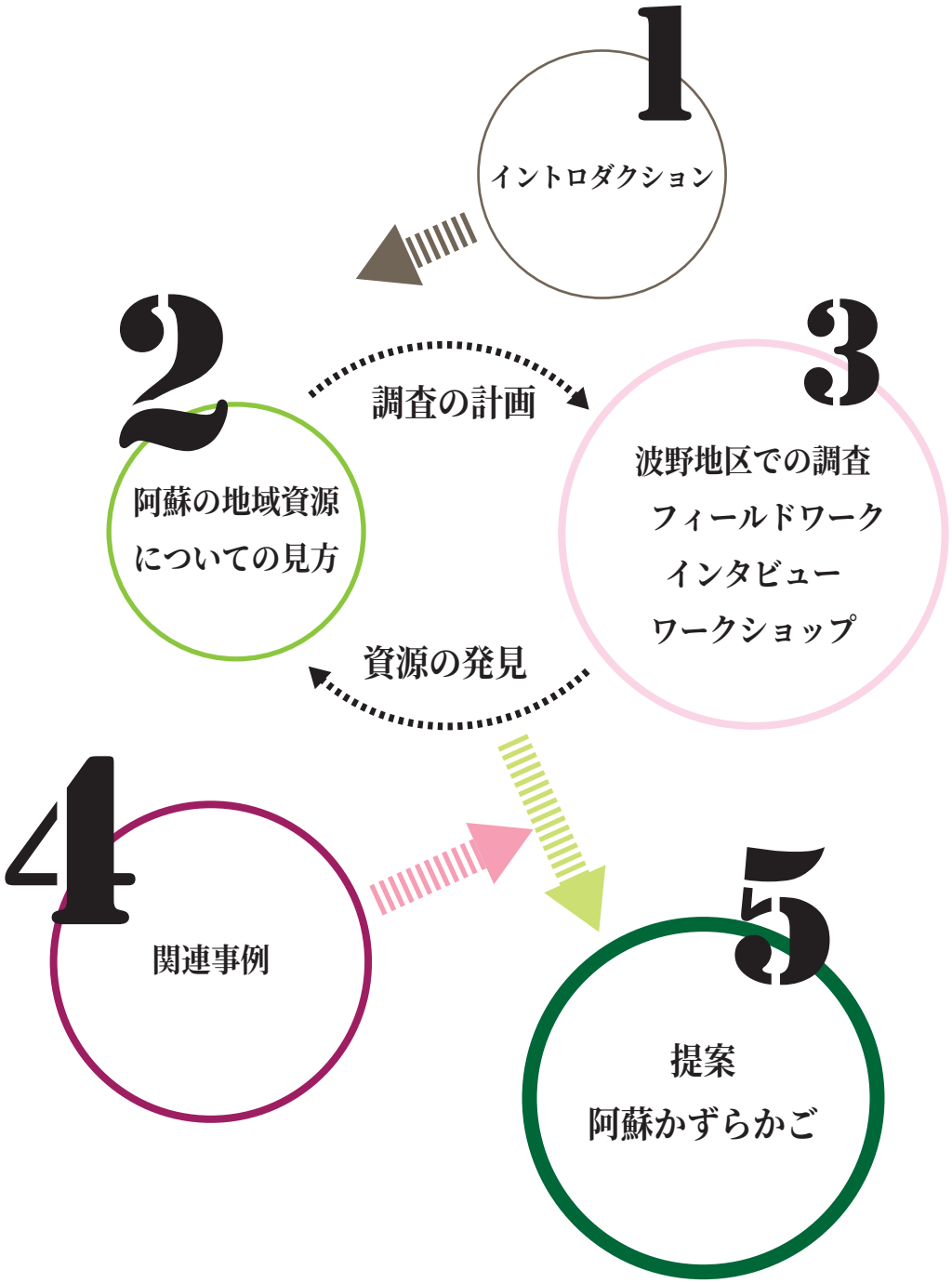
1-3）構成

２章では、阿蘇の地域資源についての見方を示します。**草原の利用と結びついた産業・文化**を育てていくことこそが、目指すべきビジョンの中心に位置づけられます。

３章では上述の問題意識のもと、武田計画室が 2014 年に行った**阿蘇波野地区**での調査について述べます。フットパスにおけるフィールドワークとインタビューのほか、阿蘇の今後のビジョンを描くワークショップを行いました。

４章ではワークショップの結果も踏まえて、草原の利用と結びついた**産業・文化の可能性に関わるヒントを与える多様な事例**を紹介します。

５章では、紹介した事例をヒントに、阿蘇の可能性の「種」を整理した後に、草原の利用と結びついた産業・文化の可能性として「**阿蘇かずらかご**」を提案します。



16,000,000

年間 16000000 人を超える観光客が日本のみならず海外から阿蘇を訪れている。
こうした交流人口が阿蘇の将来にもたらす可能性は大きい。

2 阿蘇の地域資源

2　阿蘇の地域資源

阿蘇の地域景観を特徴付け、場所のアイデンティティを与えている中心的要素とは草原であると考えます。現在、酪農の衰退により阿蘇の草原の維持が困難になってきています。しかし草原を失うことは阿蘇のアイデンティティを失うことにもつながりかねません。

2-1) 阿蘇の草原

阿蘇の景観を強く特色付けているものとして、阿蘇カルデラの外輪山とともに、そこに広がる草原がある。阿蘇の草原は減少しているとはいえ、**面積がおよそ 22000ha と日本でもっとも大規模**です。また古い歴史を有しており、平安時代の「延喜式」（901－923 年）にこの場所が馬牧であったとの記述があります。さらに最近の研究によれば、**約 1 万 3 千年前からすでにこの場所は草原であった**といいます。

阿蘇の草原には、600 種以上の植物が生育しています。その中には、阿蘇の特有の貴重な草原性植物が含まれています。このため阿蘇の草原は、**植物多様性の維持・保全**という観点からも極めて価値の高い場所となっています。

阿蘇の草原は自然条件のみによって成立しているのではありません。人間の手が加えられなかったら、この場所は森林に覆われると考えられています。野焼き、放牧、採草などの人間の干渉によって、草原が維持されていたのです。このように「人為的攪乱を受けながらも、自然の再生力の範囲内で持続的に維持されてきた草原」は「**半自然草原**」とよばれています。

人間の自然への干渉とは、人が生活手段を生産する産業のあり方に依拠するのであり、より一般的に言えば、文化のあり方に依拠します。人間の産業や文化が自然環境と不可分に相互連関する中で、阿蘇の草原は維持されてきたのだと、言うことができます。

明治・大正期

昭和 20 年代

現代

減少する草地　出典：阿蘇草原再生　環境省自然再生プロジェクト　ホームページ

阿蘇の多様な植生　出典：大場達之、「山の植物誌」、山と渓谷社、濱野周泰、「庭木花木果樹」、小学館

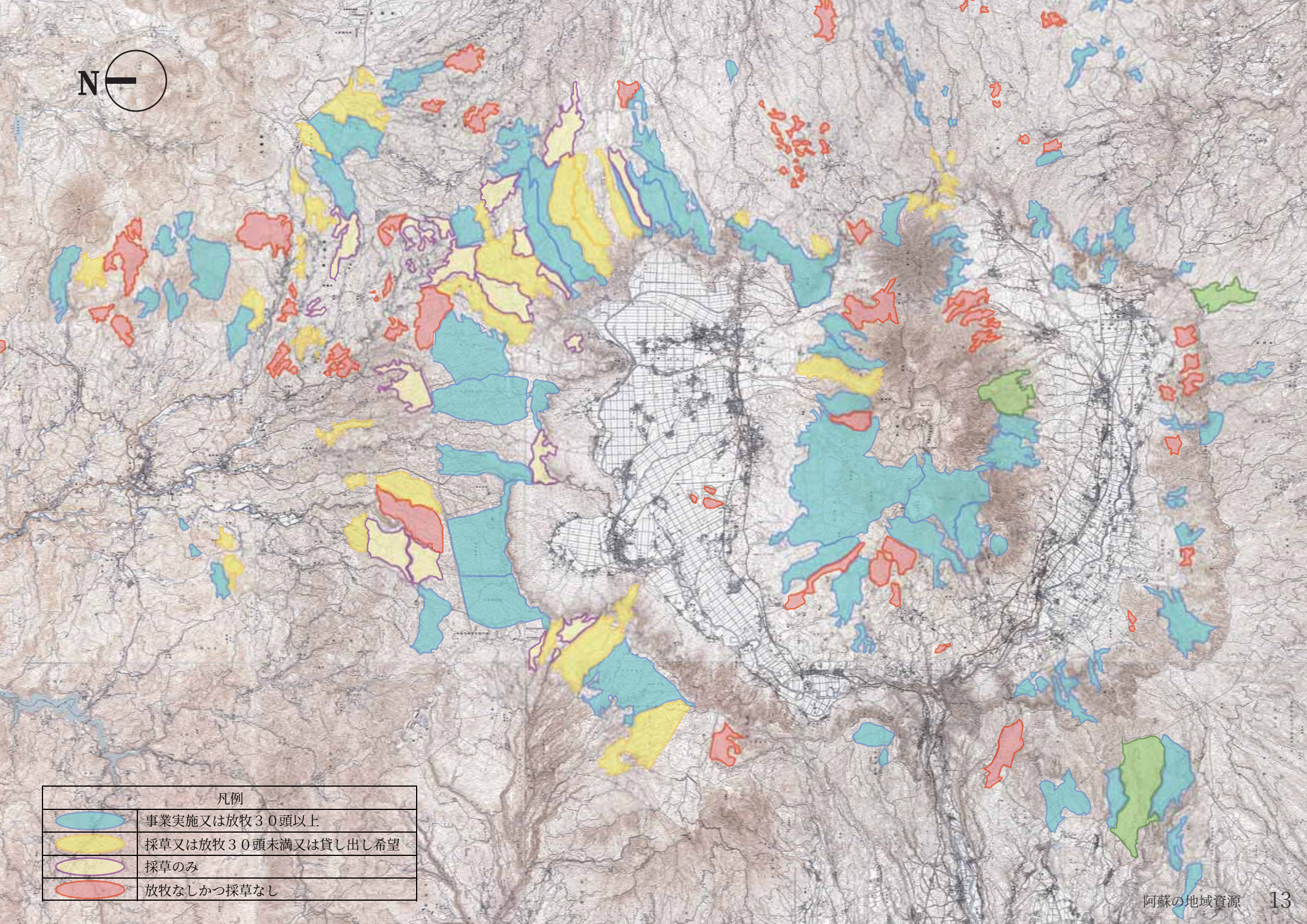
2-2）草原の分布

阿蘇の景観・アイデンティティの中心的要素である草原。しかし**阿蘇の草原面積は明治期の 44,000ha から 22,000ha まで減少**しています。これまで牧野組合を形成しながら維持・管理が行われてきましたが、維持が困難になってきています。今後の展望を考慮するうえでは、**新しい牧野の管理の仕方や利用の仕方**を考える必要性があります。

このような背景から、草原の分布・牧野組合の現状を随時把握と情報の更新が可能なマップの電子化を行いました。（データ【イラストレータ .ai】は CDROM に挿入）

牧野組合現状の電子化

阿蘇地域振興デザインセンター提供の地図に基づいて作成


N
凡例
事業実施又は放牧３０頭以上
採草又は放牧３０頭未満又は貸し出し希望
採草のみ
放牧なしかつ採草なし

2−3）産業

・農業

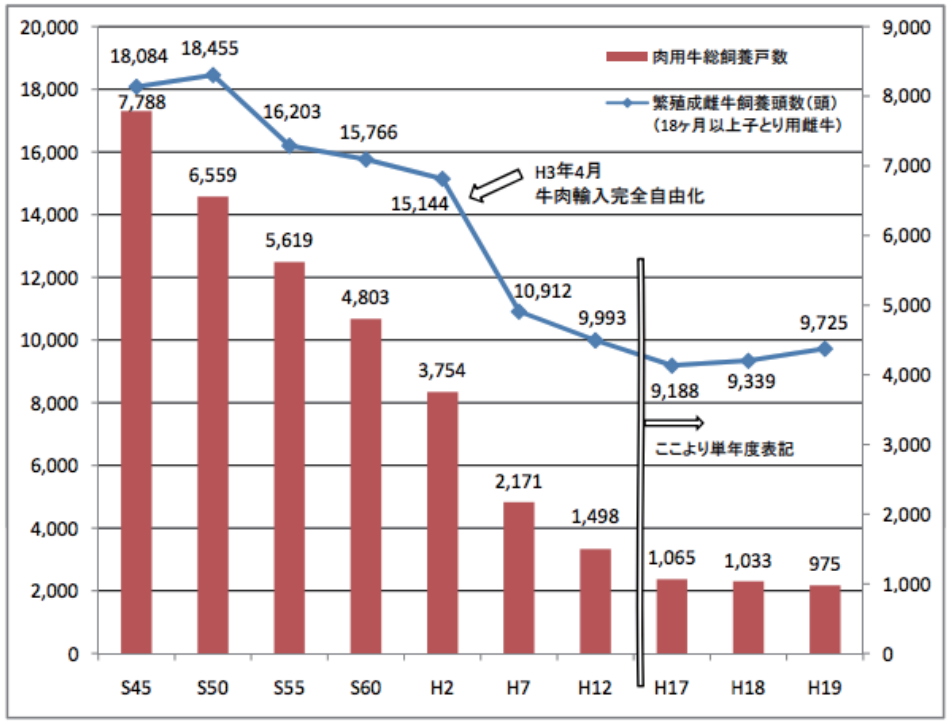
農業は阿蘇の主要産業となっており、阿蘇の就業人口の約１／４が第１次産業についています。水稲や露地野菜、施設園芸、林業など多様な農業が営まれており、中でも**畜産業の占める割合が高い**のが特徴です。こうした多様な農業は**草原の利用と結びついて豊かな生物多様性とともに発展してきた**ものであり、この点が評価されて阿蘇は世界農業遺産にも認定されています。

阿蘇では広大な草原を活用した放牧が盛んです。なかでも、**褐毛和種（赤牛）**の飼育割合が非常に高いことが特徴で、全国の赤牛飼育頭数約 21000 頭のうち、約 15000 頭が熊本で飼育されており、そのうち 43% が阿蘇の草原で放牧されています。阿蘇の酪農の特徴として繁殖農家（子牛生産）が多く、赤牛の母牛(繁殖牛)は､約 100 カ所の牧野で約 6500 頭を飼育、管理が行われている。草原に群をなし、ゆったりと草をはむ赤牛の姿は**阿蘇のシンボル**となっています。また赤牛の特徴として肉質は赤身が多く、適度の脂肪分も含んでおり、うま味がありやわらかくヘルシーな肉として注目されています。一方で、赤牛としてのブランディングや品質を決める等級の指標が確立されていないため、格付けは３～２等級にとどまり、より利率の高い黒毛和種への転換を行う農家が増加している課題もあります。これらの背景や、人口減などの問題も重なり、県内のあか牛飼養農家戸数は昭和５０年代の約 21,000 戸から約 1,300 戸まで減少しています。（参考：畜産の情報 2012 年４月号）

・観光業

観光業は農業とならぶ阿蘇の基幹産業です。熊本県内で群を抜いて観光客が多く平成２４年は 1600 万人を超えています。特に近年はアジア地域からの外国人観光客の数が増えています。

阿蘇の観光産業によってもたらされる交流人口が阿蘇の将来にもたらす可能性は大きいものです。



肉用牛飼養頭数の推移 (阿蘇地域)

出典：環境省 九州地方環境事務所　阿蘇草原自然再生事業　野草地保全・再生事業実施計画

2－4）文化

ー神楽ー

阿蘇市波野では、中江と横堀の二つの集落で神楽が伝承されています。それぞれに歴史があり、集落内の神社の祭りや近くの村の祭りなどで演じられてきました。二つの神楽ともに大分県西部の豊後神楽の系統だとされています。「古事記」「日本書紀」にでてくる神話を中心に劇化され、江戸時代に中頃に豊後各地で盛んになったものが、波野にも伝わりました。「中江岩戸神楽」は今から約270年前の明和の時代に始まり、日本神話「天の岩戸」の神事を主体に３３座を一つの芸能として構成されており、講演時には多くの人で賑わいます。

ー工芸ー

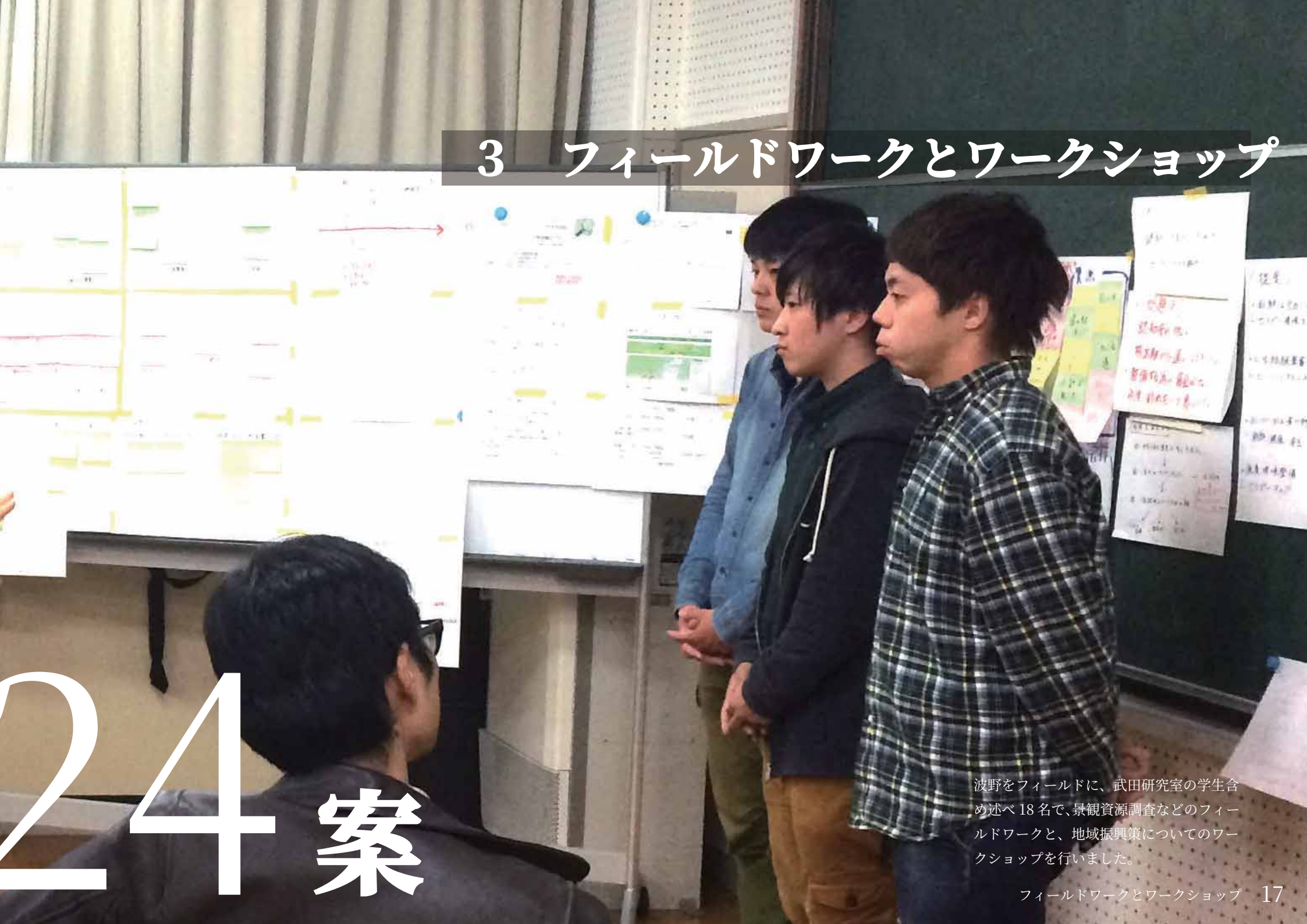
自然でとれる素材を生かした工芸が阿蘇をはじめ熊本では盛んに発展してきました。純綿糸の藍染によって素朴な縞模様と丈夫な肥後絣や豊富な木々を利用した木工品、高田焼、小代焼といった陶磁器など熊本県伝統的工芸品として70の指定がされています。そのなかには山野に自生するかずらを編むかずら細工といった伝統工芸もあり、阿蘇地方では江戸時代末期から昭和20年頃まで盛んに行われていました。しかし、植林などの影響により原材料不足に陥り伝統工芸として存続の方法を模索していく必要もあります。

※ 上記は、特に後の提案に関わるものを取り上げました。

中江岩戸神楽　出典：熊本県ホームページ（http://www.pref.kumamoto.jp/kiji_8068.html）

かずら細工　出典：熊本県伝統工芸館ホームページ（http://kumamoto-kougeikan.jp/kougeihin/cn31/cn29/pg545.html）

3　フィールドワークとワークショップ



24案

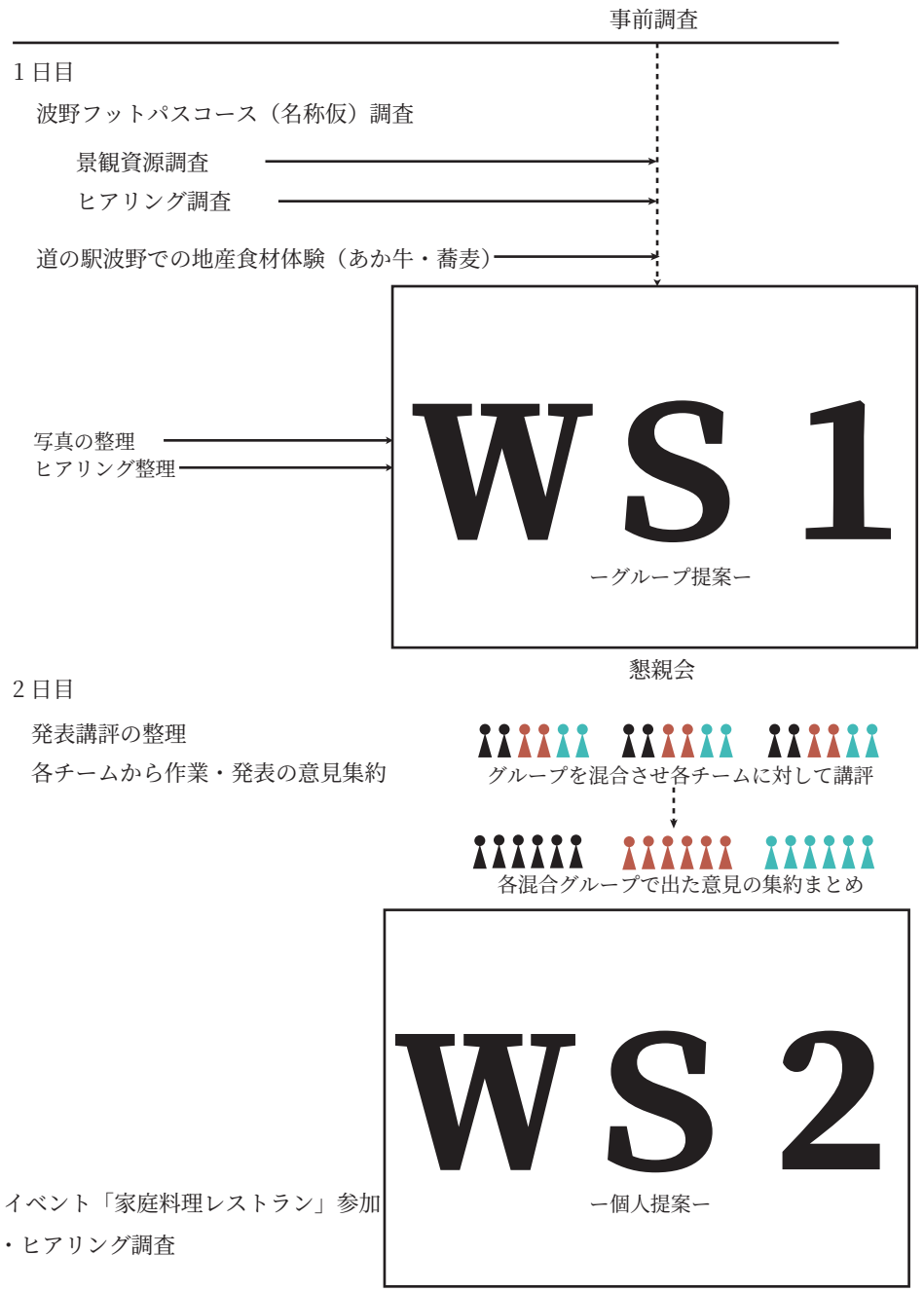
波野をフィールドに、武田研究室の学生含め述べ18名で、景観資源調査などのフィールドワークと、地域振興策についてのワークショップを行いました。

3　フィールドワークとワークショップ

2014 年 11 月 8 日（土）、9 日（日）の二日間にわたり、右に示したスケジュールで波野地域調査を実施しました。先行して９月１５日（月）、１６日（火）に産山村で行われた「産山ウォーク草原歩き」に参加（武田史朗准教授、市川雅也・学生チームリーダーの２名）し、現地の人とのふれあいやより多くの声を集めながら、地域振興策を丁寧に探る必要があると感じました。そのため、波野地域調査では立命館大学 武田研究室の院生を含む学生 16 名＋武田史朗准教授、山口純研究員ののべ 18 名で波野における景観資源に関する調査とその生かし方に関する即日ワークショップを行いました。
滞在期間中は、なみの高原やすらぎ交流館・望月克哉館長、田上一幸専門員の協力により、フットパス構想ルートの案内だけでなく、ワークショップの講評などして頂きました。

ワークショッププロセス

阿蘇波野地域調査ではグループ（WS1）と個人（WS2）、二つのワークショップを行いました。WS1 では事前調査より導き出した３つの切り口から３グループを構成し、各視点から阿蘇･波野について考え、地域振興策を模索しました。WS2 では、フィールドワークや WS1 とその講評を踏まえ、各個人で波野の将来を決定的に左右させる要因や前提条件を自由に設定し、提案を行うことで、より多くの意見をブレストしながら可能性を広げてきました。



産山ウォーク草原歩き

フットパスによる地域振興策に取り組んでいる産山村でのフットパス構想の活動に参加させていただきました。
武田計画室（立命館大学･武田研究室の学生１名同行）として、第２回産山ウォーク草原歩きに参加し、実際にフットパスコースとして考えられるルートを歩きながら、**阿蘇の景観資源**や**町おこしに意気込む地元の方々の熱意**を感じました。

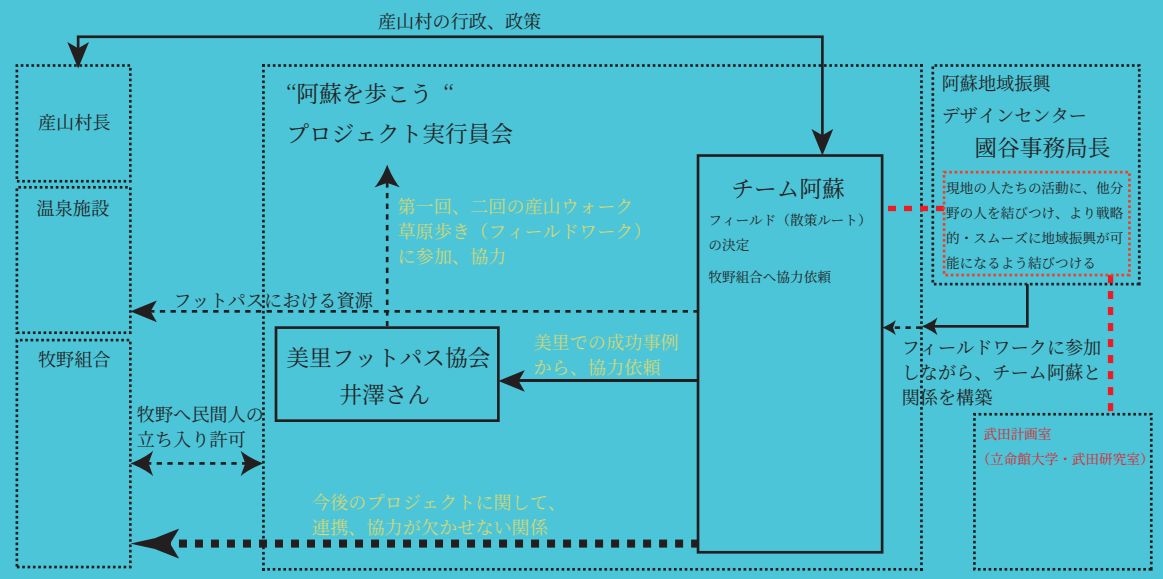
産山ウォーク草原歩きには、「**牧野を歩かせてもらう**」といった明快なコンセプトもあり、牧野を管理する**牧野組合の協力**を得るための努力が垣間見えたほか、地元の方以外にもフットパス事業を阿蘇･美里町で実践された経歴のある、美里フットパス協会の井澤るり子運営委員長の協力や、産山村の村長なども関わり、地域だけでなく、**地域間のつながり**も根強いことを感じました。
また牧野組合の協力により、普段入ることが出来ない牧野の中を歩かせていただき、「フットパス」の構想を通して、牧野の管理の在り方など議論が広がる可能性を感じました。
「フットパス」という今までになかった資源の捉え方によって地元の方々が一つに集まろうとする流れが生まれていること自体素晴らしいことでもあると思いますし、**大きなチャンス**でもあると思います。
そういった活動を町のなかのコミュニティとして終わらせるだけでなく、地域そして阿蘇全体での**地域振興のきっかけ**になっていることや、「広大な草原の景観」を守り、次の世代に繋いでいくための**希望**であることを、具体的に地元の方々にも実感していただくことが今後必要な課題であると思います。私たちはその役割を担い、具体的な事例や提案の可能性を見せて行くことで携わることができると感じました。

プロジェクトの広義的意義の設定

広義的意義

広大なカルデラを構成している阿蘇山は野焼きや放牧といった文化を介して、草原を維持してきた。しかし、近年高齢化の進行、海外から牛肉大量輸入に伴い牧野の経営自体が危ぶまれ減少している。
これまでのシステムが崩壊し始めている現状から、新しい阿蘇の自然資源や文化の維持と共に、活性化を図るための枠組み、デザインの提案を行う。

事業委託形態
関係把握

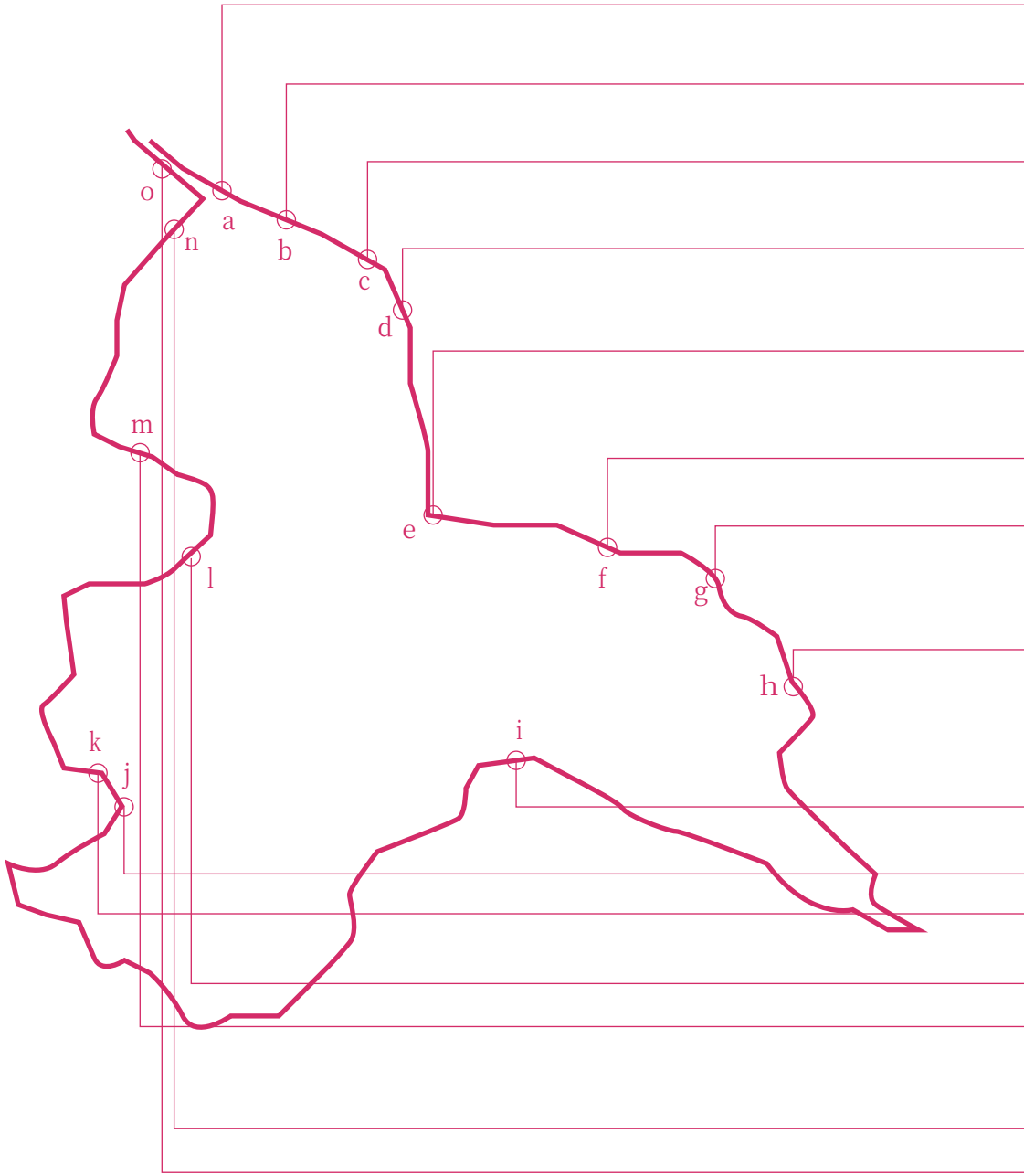


3-1）景観資源の発掘

3-1-1）景観資源調査

フットパス想定コースを実際に歩き、景観資源を発掘するための調査を行いました。調査の方法として**学生 16 名**に各自カメラを用意し、**良いと感じた風景や対象物の撮影**を行いました。事前にフットパスコースの上空写真を用意し、写真を撮った位置のプロットと資源の内容をメモする作業を遂行し、のちに分類整理を行うことで、**景観資源の重要度や景観資源になりうるものを導きだす**試みをしました。

フィールドワークで歩いたルート



5
10
15
20
25
学生がよいと思って撮影した写真の点数
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l
m
n
o
撮影地点

a

d

f

h

l

3-1-2）インタビュー

野焼きの作業に集まっておられた現地の方と蕎麦祭りでそばを打って頂いたお母さん方にお話を伺いました。阿蘇の文化・景観を守る現地の人々の言葉からは、問題の深刻さを感じさせる面もありながら、そこに住む誇りを強く感じました。

気象の変化によって、昔はなかった**地崩れ**が多くなった。

他の地域でもいろんな伝統芸能があるが、**この地域の神楽ほどのものはなかなかない**。

神楽を通して集まって話をするのが楽しみで、**そのために頑張っている**ところもある。

他にも同じように**過疎化**が進んでいる集落というのがたくさんあるだろうが、この地域はこういう集まりがあるから、**神楽のために帰ってくる若い人**がいる。

道の駅は農家の作物を観光客に売り買いしてもらう大切な場所。

波野の経済を支える中心的な役割を担っている。

昔は牛が多かった為、山の草などはほとんど食べられており、現在の一面にススキが広がる風景とは**異なった景観の美しさ**があった。

農業だけで生活を賄うのは天候に左右される為、厳しい。
ジオパークそして**文化遺産**はその土地、阿蘇に住む**住民の生活そのもの**。

昔はたくさんの牛がいる風景だったが、貧しい集落のため牛を手放しお金に換えて生活していた。

杉林の植生に対して、かつては資金を与えられていなかったが、現在は**国からの補助金**をもらい**景観保全の役割**を担っている

今後農業、野焼きなど受け継いでいくためには若い人が欠かせず、**10 代から 30 代で 5、6 人必要**。
　一世代に最低 2 人いれば、互いに助け合い協力でき人脈なども広がるため**受け継いでいくことができる**。

3-2）ワークショップ

3-2-1）ワークショップの課題設定

・営みを維持することは自然景観を守ることにつながる

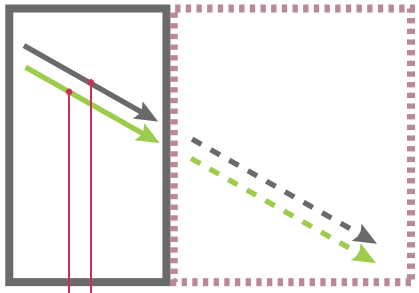
自然と生活が不可分であることを改めて痛感しました。そんななか、「**一世代に最低 2 人いれば、互いに助け合い協力でき受け継いでいくことができる**。」こういった言葉は少しの人が興味をもち、振り向いてくれるだけで、景観や生活を維持するチャンスがまだあるという**希望**でもあると思います。

・産業構造が変化するなかでの景観維持のあり方を改めて考える

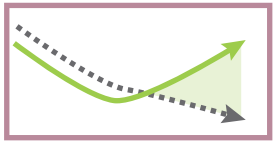
人口減少や高齢化など産業構造の変化の中で現状の維持が危ぶまれるなか、私たちは景観の維持と放牧の関係だけでなく、これからの時代に合わせた「＋α」のつながりを持つべきではないでしょうか。

誇るべき、赤牛と放牧の魅力をより高める価値の向上によって、壮大な景観維持を行う伝統の継承はもちろん、**放牧だけでない新たな価値を長い歴史から見出すこと**で、阿蘇の本質的価値である景観を維持し、その**景観の維持は阿蘇の人の営みの誇り**としてコミュニティを形作るバックボーンになると考えます。

産業構造が変化するなかでの景観維持のあり方を改めて考える



あか牛の放牧を維持できる未来



あか牛の放牧＋αで維持する未来

A チーム

B チーム

C チーム

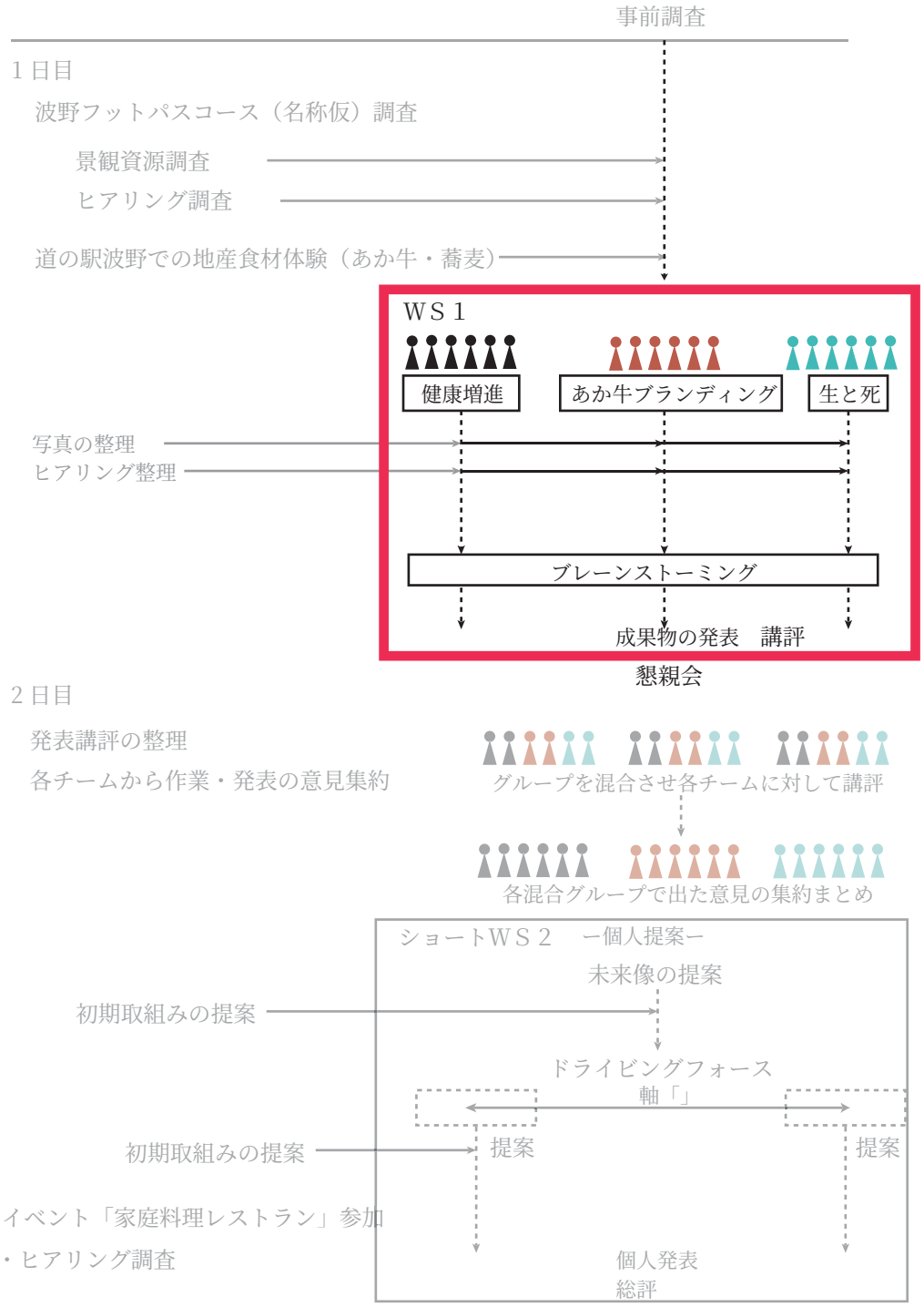
ワークショップでは

どんな未来が描けるか

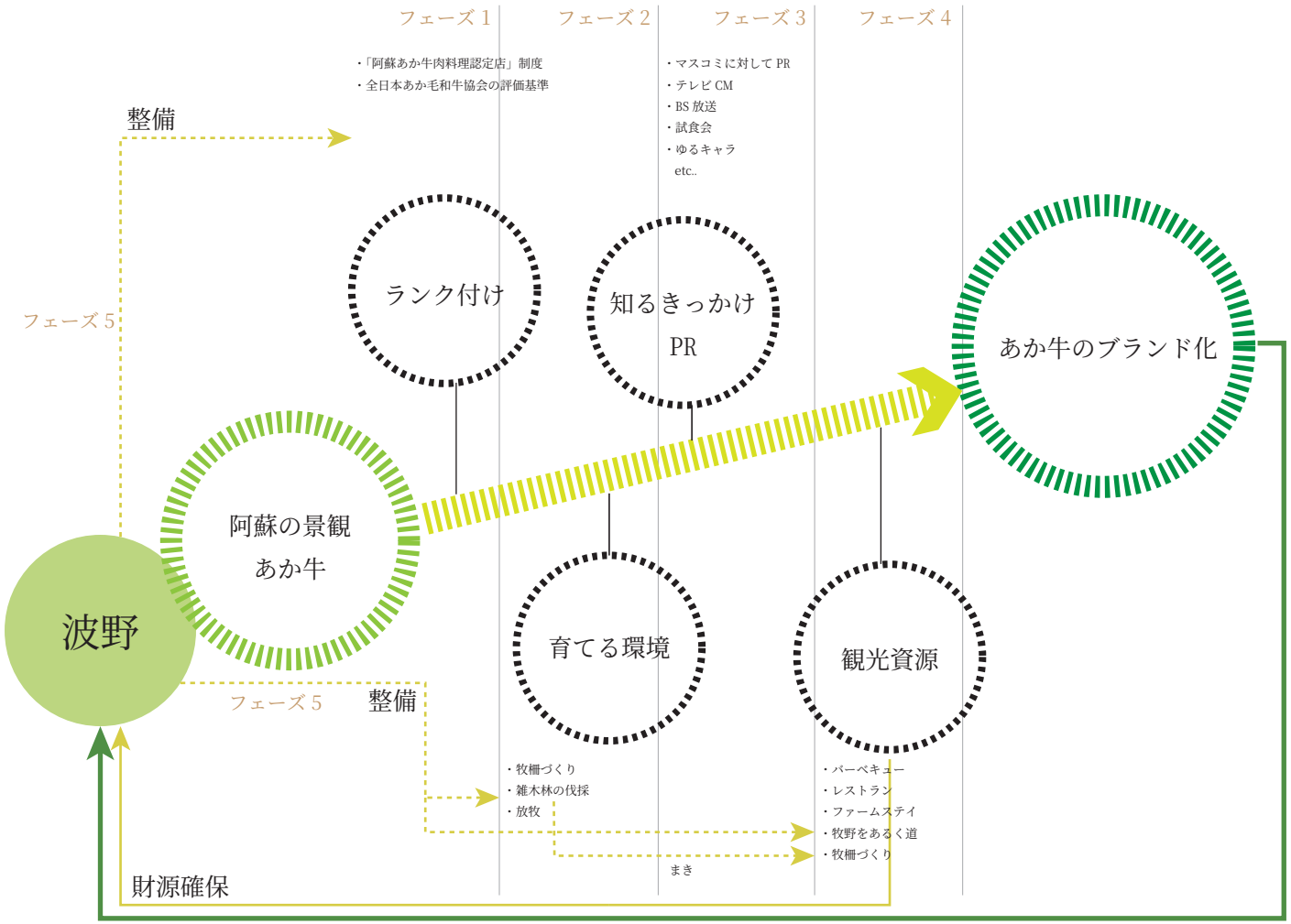
3-2-2）

WS1

WS1 では事前調査より導き出した３つの切り口から３グループを構成し、「シナリオプランニング」の考え方にそって景観①資源調査やヒアリング調査の結果をそれぞれの視点で整理する作業を経て、②シナリオを描きながら、③そのシナリオに向けた提案の可能性を模索しました。


事前調査
1日目
波野フットパスコース（名称仮）調査
景観資源調査
ヒアリング調査
道の駅波野での地産食材体験（あか牛・蕎麦）
WS1
健康増進
あか牛ブランディング
生と死
写真の整理
ヒアリング整理
ブレーンストーミング
成果物の発表　講評
懇親会
2日目
発表講評の整理
各チームから作業・発表の意見集約
グループを混合させ各チームに対して講評
各混合グループで出た意見の集約まとめ
ショートWS2　ー個人提案ー
未来像の提案
初期取組みの提案
ドライビングフォース
軸「」
提案
提案
初期取組みの提案
イベント「家庭料理レストラン」参加
・ヒアリング調査
個人発表
総評

あか牛の放牧を維持できる未来

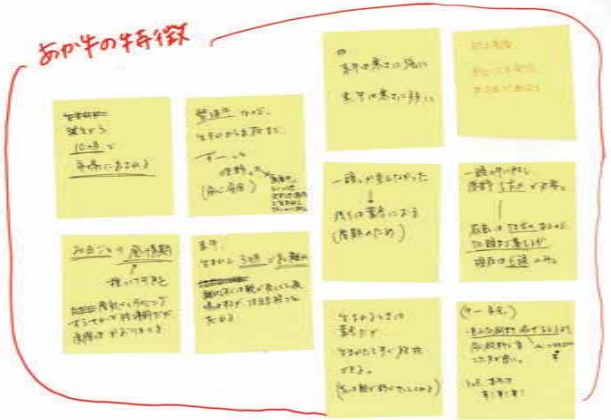


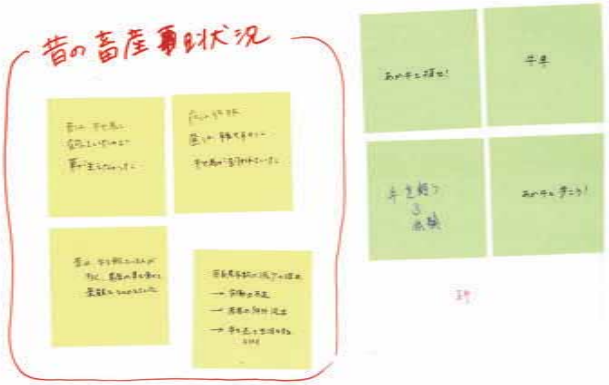
チーム A の提案

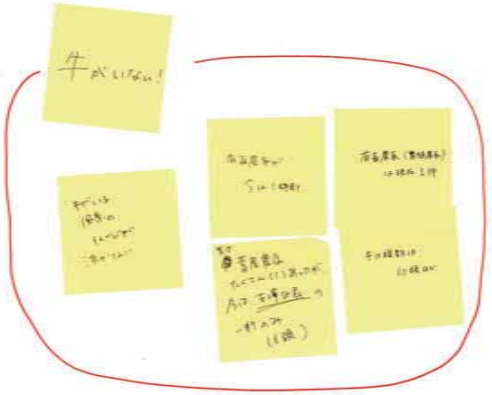
牧野組合の協力によって牧野の中に入り、散策できることに非常に魅力を感じました。壮大な草原や野焼きに合わせ、放牧された牛の様子が確認できることで、より酪農と景観が結びついた土地全体の良さを体感できるポテンシャルを感じました。

・みんなで牧野をつくる

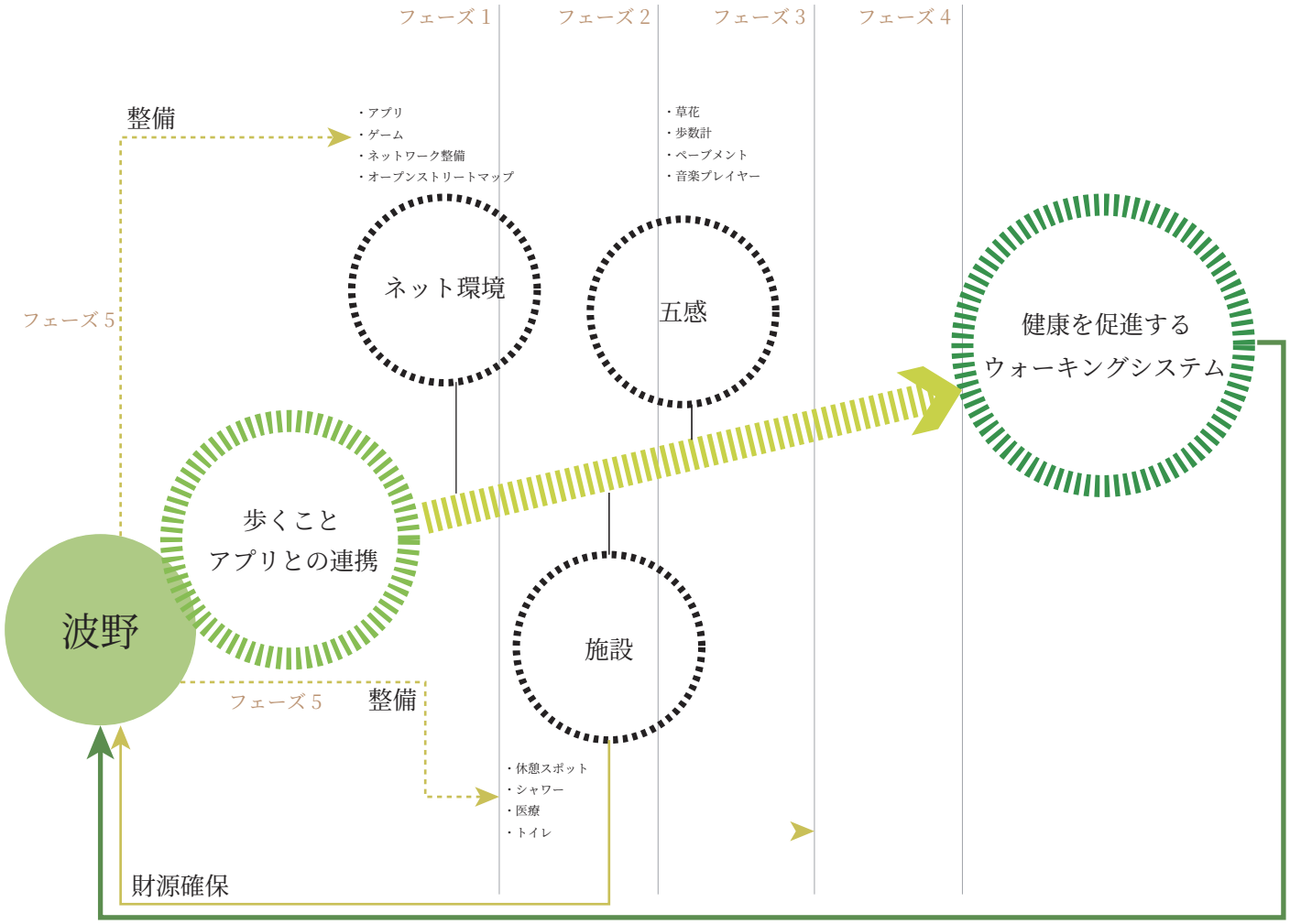
赤牛の魅力を伝えるために、①まず「**認知度を上げる**」事が課題だと感じます。**健康**などのテーマに合わせて赤牛に**付加価値**をつけた PR 活動を今後も続けていくことが大切だと思います。②「**来て良さを知ってもらう**」- 放牧で育てられる健康な牛は**食の安全の象徴**でもあります。来て見てもらうことが一番のブランド化につながると考えます。③「**ふれあう環境をつくる**」- 牧野のなかにフットパスなどの散策コースを設けることでより、**阿蘇を感じる環境**が出来ると思います。そのなかでも牛の管理に使われる GPS の機能を観光客にも可視化できるような仕組みや水飲み場などの整備とフットパスの整備が重なるような計画も考えられます。④「**滞在するきっかけ**」ファームステイなど滞在ができる場を計画しながら、牧柵づくりや野焼き体験など牧野の管理の一部をみんなで担う少しの関わりと、関わってできる牧野の環境に愛着を持ってもらえることが**帰属意識**につながると考えます。


あか牛の特徴


昔の畜産事業状況


牛がいない!

あか牛の放牧＋健康で維持する未来



チーム B の提案

阿蘇の山々の連なりが見える景色や、ところどころで見つかる野草や放牧された牛など、歩いて飽きない場として魅力を感じました。同時に初めての人でもそんな魅力をどんどん発見していけるような仕組みや、産業や景観を生かしたセラピーなど、特別な環境を作ることができると感じました。

・牧野を健康促進のフィールドに

牧野の新しい利用の仕方として①「**歩く場**」を提案します。牧野組合との協力が必要ですが、牧野は**野草の循環や赤牛など健康の「代名詞」**でもあると思います。その場を歩くことの楽しみは牧野を知ってもらうきっかけにもなると思います。②「**魅力の発見と共有**」魅力がたくさん隠れている環境を生かし、発見した魅力を**ｵｰﾌﾟﾝｽﾄﾘｰﾄﾏｯﾌﾟ（OPS）**などを活用しネット上で共有することでリアルタイムに魅力が変化する「**行ってみたくなるマップ**」が作成できると考えます。③「**道をつくる**」OPS の活用などにより魅力に合わせた道の構想をしていきます。次も訪れたい、次はあの道を歩いてみたい。そんな要望をダイレクトに取り入れ効率的な整備を行っていきます。④「**みんなで環境をつくる**」マップづくりを通して魅力を共有し、時には問題も共有することで、**観光客の目が管理の目**にもなる環境づくりができると思います。

〈提案〉

・新鮮な空気・壮大な景色
└セラピー環境を整備する

・人生経験豊富な人々
└ビニールハウスレストラン

・おいしい水と食べ物
└新鮮・健康・安全

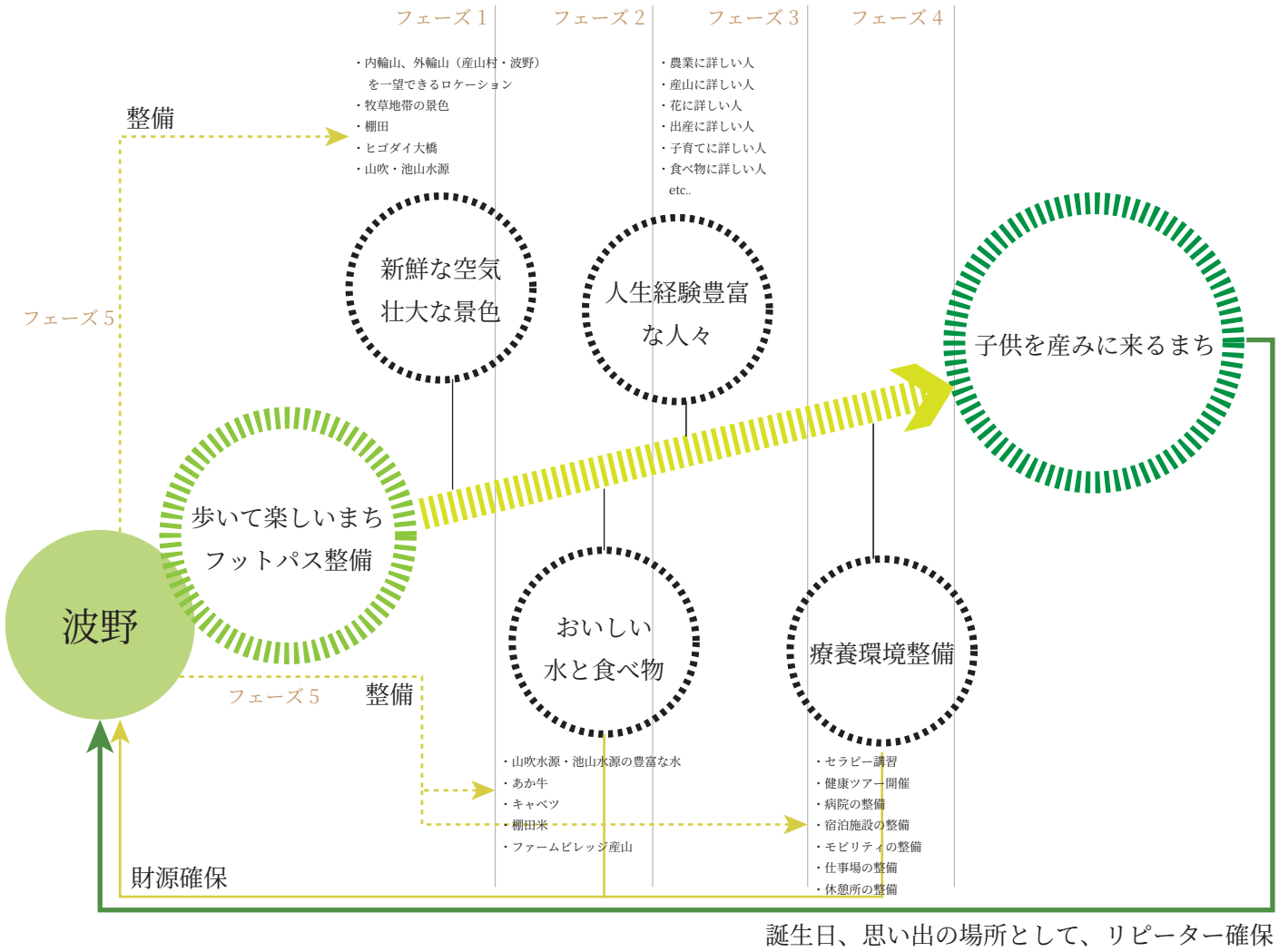
・療養環境整備
└セラピーマップ

〈メリット〉

・認知してもらえるきっかけ

x
├ 後継者
└ リピーターの仕組み

あか牛の放牧＋冠婚葬祭で維持する未来



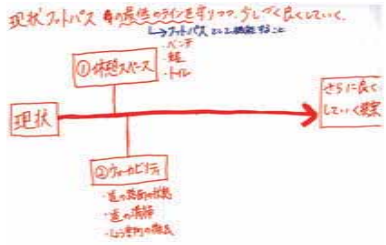
チームＣの提案

壮大な景観やおいしい食べ物など「生」を感じられる非常に貴重な環境であると感じました。世界農業遺産への指定にも裏付けられ、培ってきた文化が大地と人をつないできた神聖な場所でもあると強く感じました。

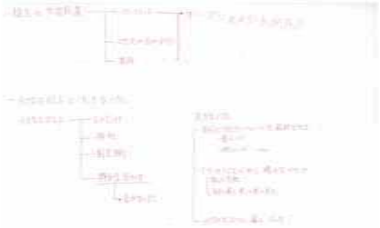
・特別な思い出の場

阿蘇の景観を生かした①「**リラクゼーションの場**」を提案します。セラピーなどの健康的な視点を取り入れながら、気持ちを休めることができるような場が様々なところで展開できると考えます。②「**人を知る**」阿蘇にはこの自然とのつながりを深く知り、食の大切さを身に染みて感じている**経験豊富な人**がいると感じました。そんな人との関わりは暖かく、安心感を感じるなによりの財産もあると考えます。③「**人生の特別な場**」子供を産む、産んだ子供が育つ、結婚または身を収める。そんな場として阿蘇の特別な景観や文化は活かされる可能性があると思います。一次的な滞在の場であっても、冠婚葬祭などの**特別な場**としてその環境が用意されることで、そこにまた訪れたいと思えるような特別な場にもなります。戻ってくる、その土地に**特別な誇りを持つことができる環境**とそれに見合った景観をもった阿蘇だからこそ可能な提案であるとも感じます。

11.8の発見。
現状のフットパス
敷地の要素
検査系
空間感
現状のフットパスの マイナス点
敷地のマイナス点
管理のマイナス点
ソフト面
ハード面


現状フットパス
現状
さらに良くしていく提案

フットパスを歩く人から見てマップを作成（OSM）
情報提示

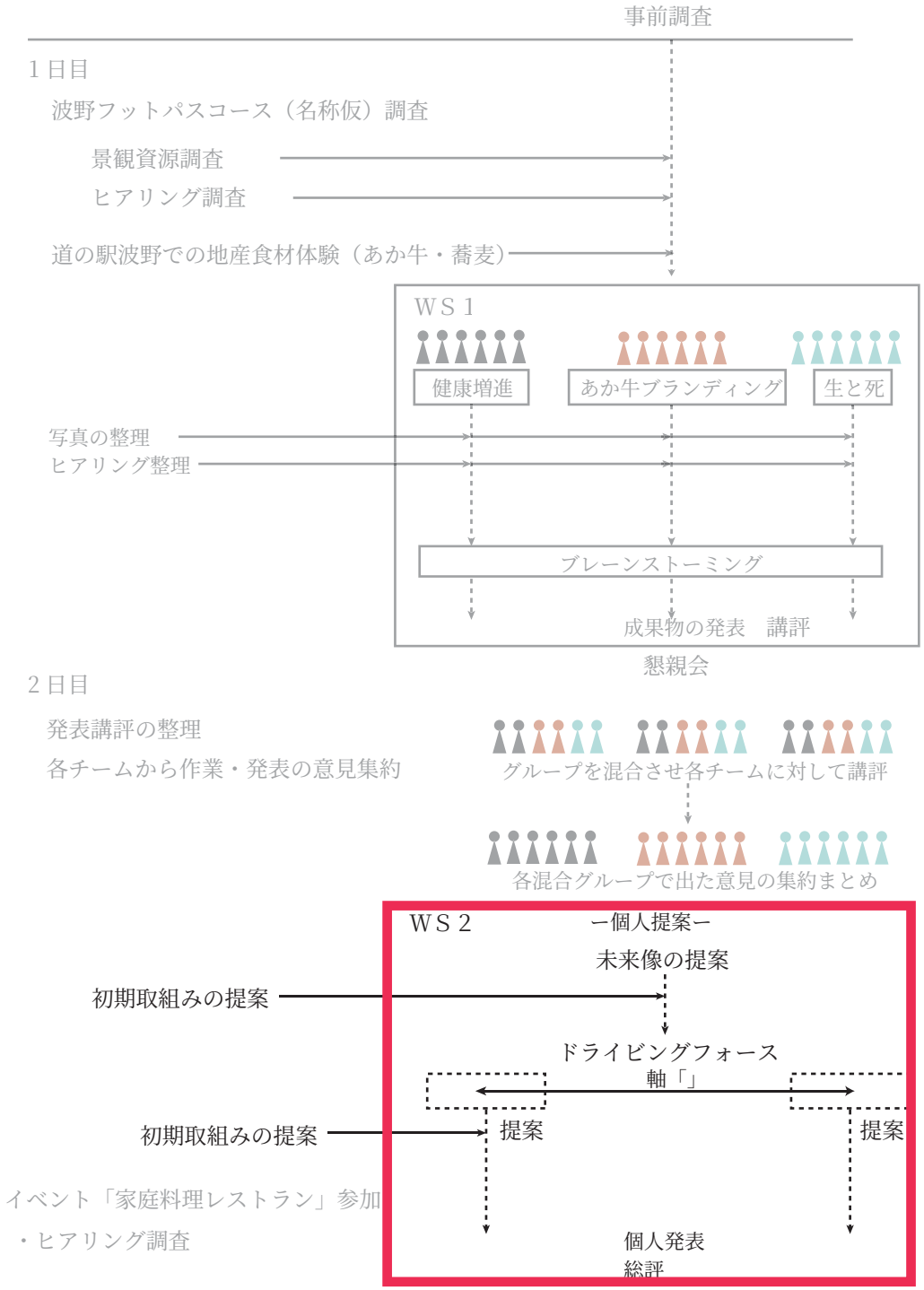


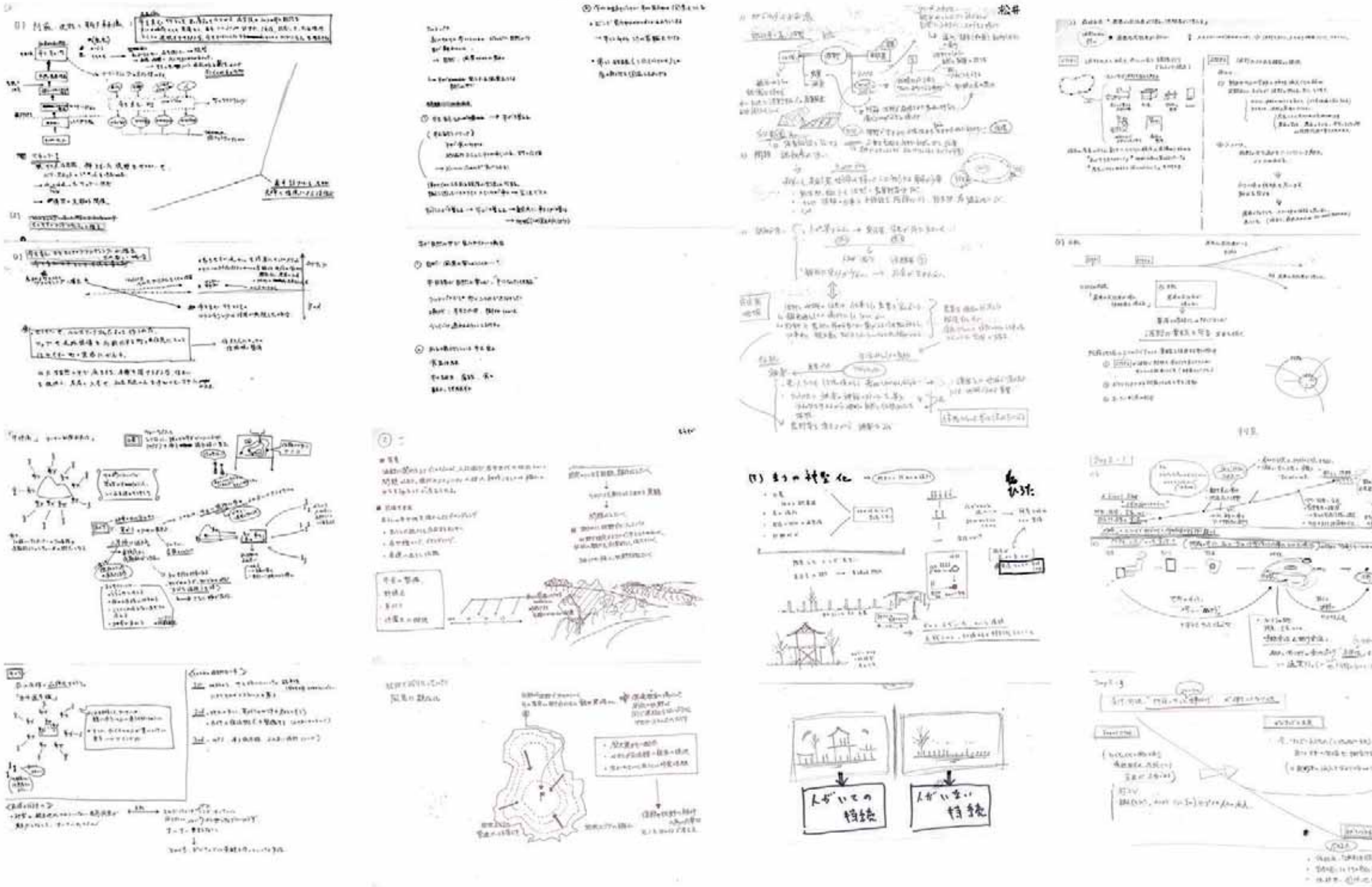
ソフト面
現状にあり、さらに活かしていける
現状にはないため、必要になる
ハード面
現状としあり、さらに活かしていける
現状にはないため、必要になる

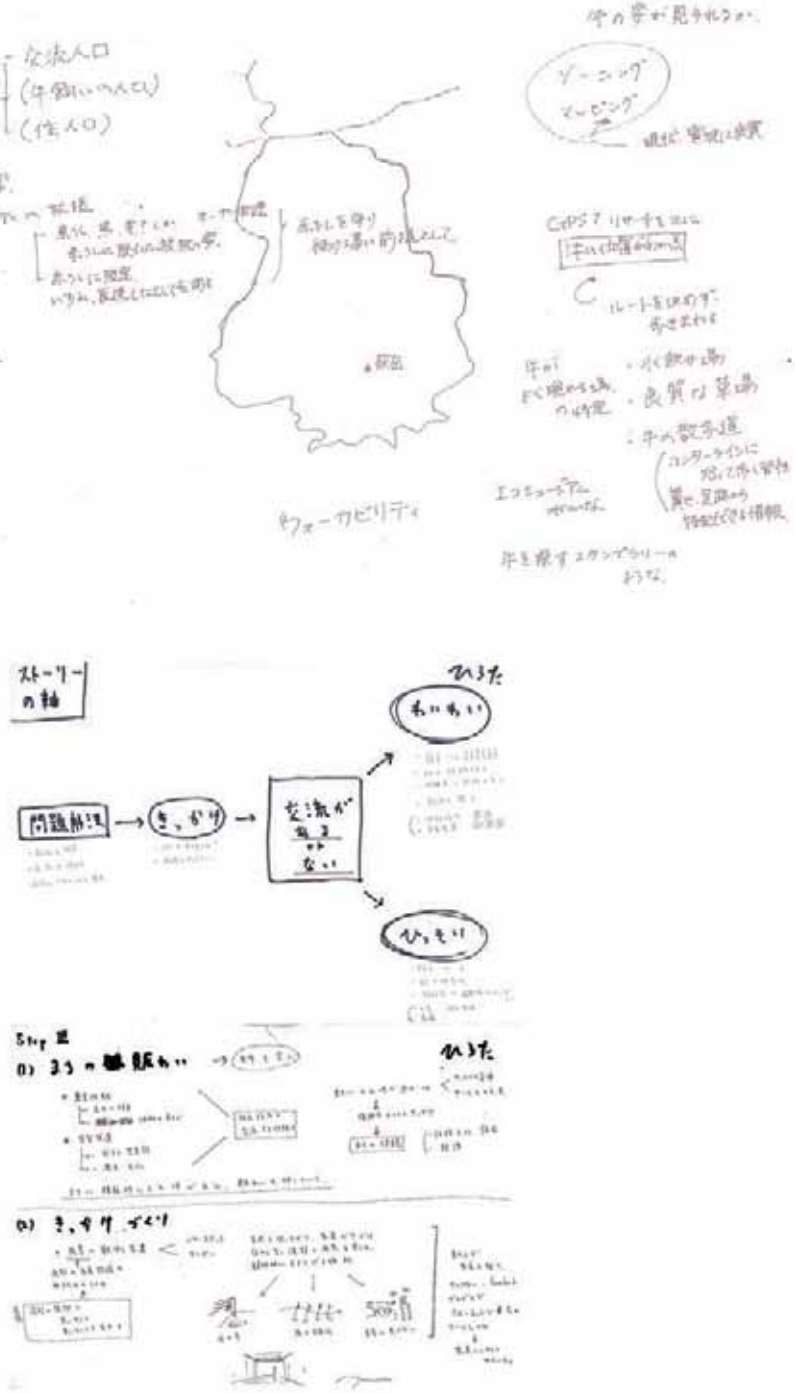
3-2-3）

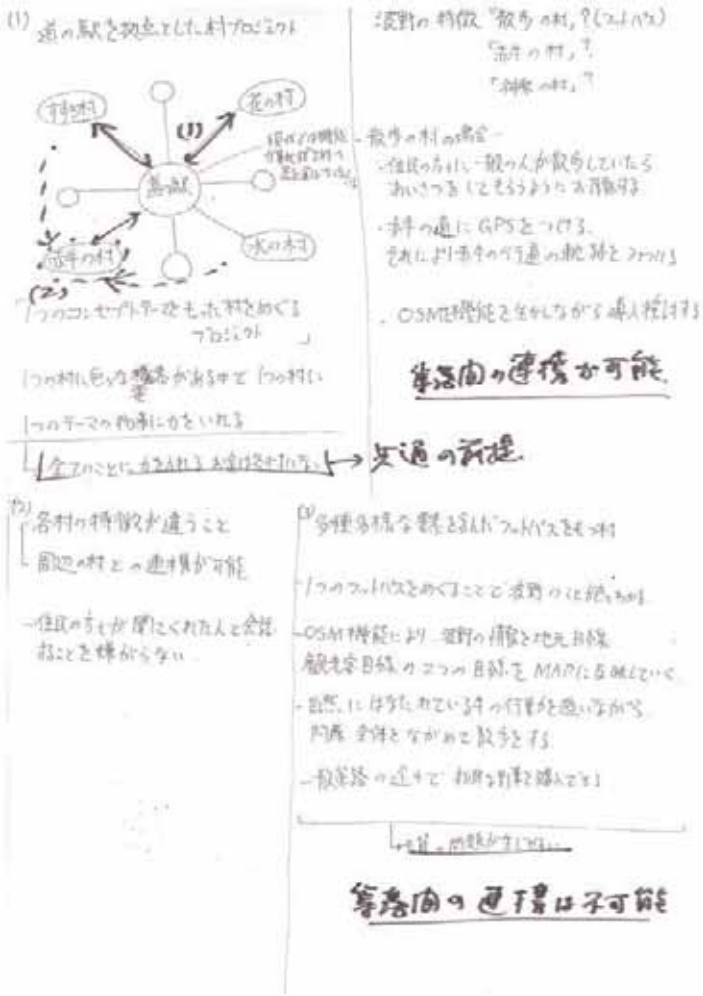
WS2

WS２では WS1 の成果を踏まえ、波野の将来を決定的に左右させる要因・前提条件（ドライビングフォース）を各自設定し、①ポジティブな未来像と②要因・前提条件が反転した場合における、それでもポジティブな将来像とそれに向けたステップの提案を行いました。このような WS プロセスにより予測の難しい未来に対して柔軟に対応できるような提案を心掛けています。


事前調査
1日目
波野フットパスコース（名称仮）調査
景観資源調査
ヒアリング調査
道の駅波野での地産食材体験（あか牛・蕎麦）
WS1
健康増進
あか牛ブランディング
生と死
写真の整理
ヒアリング整理
ブレーンストーミング
成果物の発表　講評
懇親会
2日目
発表講評の整理
各チームから作業・発表の意見集約
グループを混合させ各チームに対して講評
各混合グループで出た意見の集約まとめ
WS2
ー個人提案ー
未来像の提案
初期取組みの提案
ドライビングフォース
軸「」
初期取組みの提案
提案
提案
イベント「家庭料理レストラン」参加
・ヒアリング調査
個人発表
総評


人がいての持続
人がいない持続


ゾーニング
ストーリーの軸
問題解決
ポジティブな未来像
反転した時における将来像



個人提案の一例

・縮小するなかで各街が強みをもつ

なかなか人口の確保が難しい現状から縮小していくことが予想される阿蘇において、今までのように、すべてのまちが放牧を行い、農業を行うといったすべての産業を行うことは今後難しいと感じました。

しかし、阿蘇には放牧やビニールハウスの農業、キャベツ畑やヒゴダイなど様々な魅力があります。その魅力を各町でひとつづつ**特化**させつつ、それぞれをつなぐ**ネットワークを構築**することで町の輝きをもったまま維持していくことが出来るのではないかと考えました。

少ない人数でも、一つのことに誇りを持つことで強みになりますし、観光客は各拠点を巡るように阿蘇を楽しみます。

現在の道の駅やなみのやすらぎ交流館はその観光の拠点でもあり、各地の魅力を紹介するような活動を行うだけでなく、各町にも住民と観光客のよりどころとなるような拠点を作ることで、**拠点と拠点が連携**しあうような関係ができると思います。

3-3 ディスカッション

望ー望月館長（なみの高原やすらぎ交流館）　武ー武田准教授　山ー山口純研究員　学ー学生

武ー WS やフィールドワークを通した総評をよろしくお願いします。
望ー皆さんがいるという事だけでこの地域にとって大きいことです。
この地域はどちらかというと若い人がどんどん出て行ってしまうような場所。
地元のおじさんに一人目が質問をしたとき、にこっとした満面の笑顔になった表情をみただけで、「もうオッケ！！」というようにその機会の意義がすごくあったと確信した。
外から若い子が来てくれて、質問をする。私が同じ人に質問した時にくらべて、10 も 20 も掘り下げて丁寧に説明してくれる。それだけ外から若い子がきてくれることをうれしいと感じているし、地域のことを愛していることを素直に表現してくれる。そういった意見を引き出せる可能性を若い子たちはもっている。だからこそどんどん質問していってほしいし、遠慮もしなくていい。

提案に対して、実現可能かどうかは関係ない。これだけのことを波野のために考えてくれること自体がうれしいこと。
提案の実現のためにはどんどん関わる人が増えるにつれてハードルが上がるものでもあるし、これからそういう立場でぶつかることがあるのでその時はがんばってください。それでも今日みなさんが来てくれたことが本当によかったです。

武ーありがとうございます。私たちが突然押しかけるような形でいろいろ無理をいってしまったなかで、ありがたいというお言葉をいただけてよかったです。では発表の他にほんとはこう思っていただとか、これはどうなのかといった自由な疑問がある方質問をどうぞ。

山ー若い人が波野に来る可能性は実際どれくらい見込めるものなんでしょうか？

望ー厳しい言い方をすると若い方を呼んでくるという目標はどの地方自治体も望んでいるし、住民もみんなこの問題が難しいことを痛いほどよくわかっている。
ただ、じゃあみなさん自身が今実際に提案されたなかで住みたいと思うかが重要で、本当に住みたいと思えるにはもう一歩踏み込んで掘り下げるよう努力してみてほしい。
今の若い子にほしいものは何かときくと、コンビニや信号機、映画館と答える。じゃあそれらをすべて波野にそろえたとしたら、若者が来るかといえば実際はこない。
やはり自分がこれなら明日からでも、大学卒業した次の日からでもすぐ来て住みたいと自信をもって言えるくらいの提案まで踏み込んでしてほしい。「もしやすらぎ交流館がこんな施設だったらぜひ来てみたい。」このレベルくらいまで踏み込んだ話をこちらも聞かせてほしいし、どんどんむかってきてほしい。

たとえば原発の再稼働の話。
再稼働賛成かのアンケートをとってみると、もちろん当たり前あのように反対が多い。
じゃあなぜアンケートを実施するのか。
そのアンケートは賛成か反対かという質問だけじゃなく、なぜ反対？といった様々な角度からなぜ？を問いかけるのも大切なんですね。
真意を引き出すというのは本当に難しいこと。ただその真意をつかむことが大切で、その意見をしっかり把握した上でものごとに取り組めるかが重要なんだとおもいます。
明日の蕎麦祭りに参加する機会で、おばさん方にどんな質問をするといいのか、どういった向かい方をすることで本音を聞き出せるのか、意識してみてほしい。

武ーまた明日、そばを楽しむだけでなく蕎麦祭りでお母さん達の本音をうまく聞き出せるようにするミッションがうまれましたね。（笑）

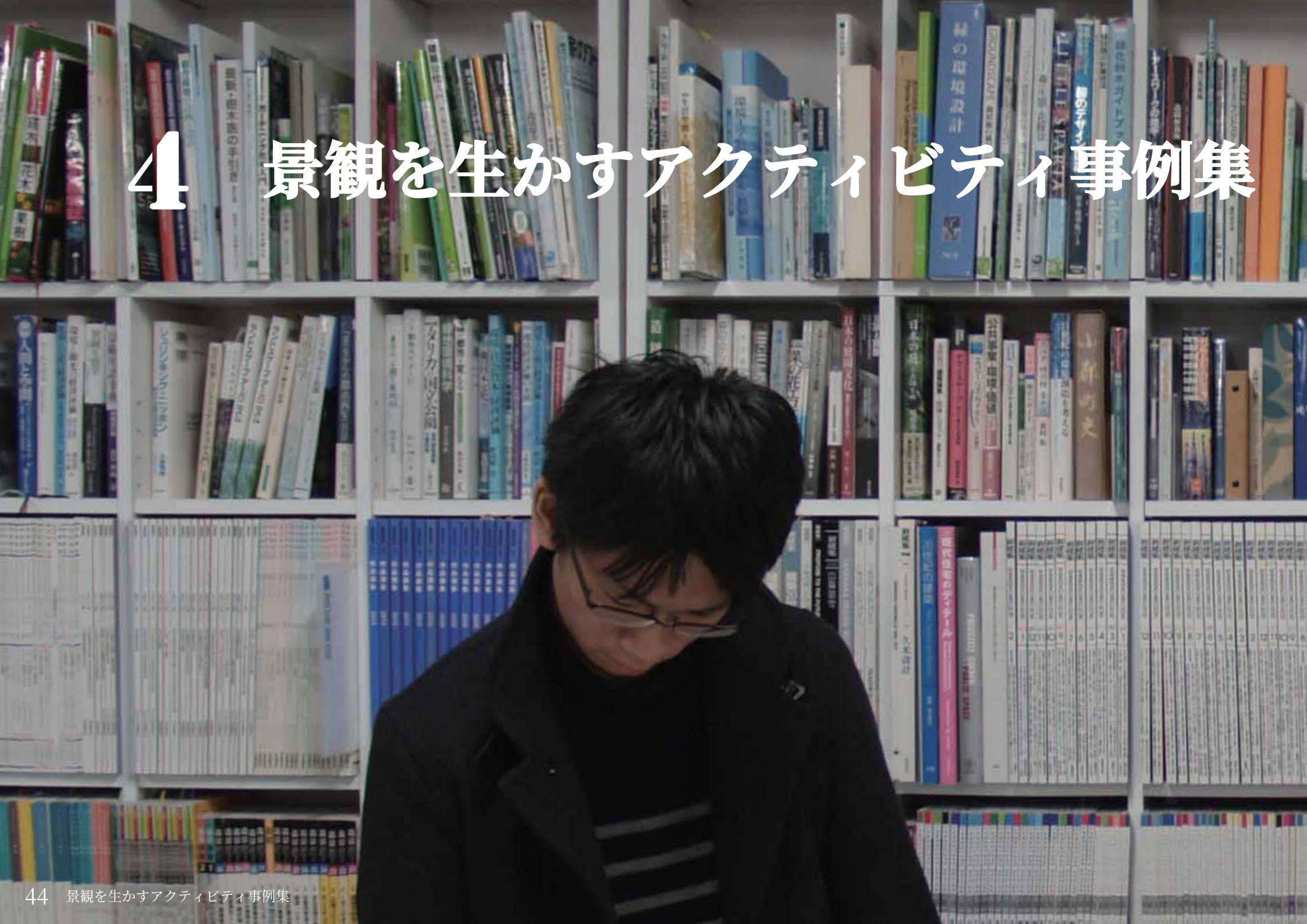
望ー忙しくしてるお母さん方を捕まえるのは難しいですからね（笑）

学ー今日活動をさせていただいて、様々な人に関わらせていただいたんですが、地域の方々はこういった活動をどのように感じているのでしょうか？

望月ー地域のみなさんはグランドに車が停まって交流館に光がついているのを見ています。ここは小学校の跡地で、普通廃校になった学校は時間がたつとどんどん廃れていき、窓ガラスが割れたり、割られたり、野草が生い茂るげったりするような姿を見るのが忍びない為、地元の方々は廃校を取り壊すことを望まれます。
しかしこうして利用されている様子を見て安心をしますし、取り壊さず地域のために活用されることを実際喜んでくれています。
こうした施設があるからこそ人がやってきてくれるその活動自体を好意的にみてくれています。

武ーなるほど、明日はもちろん、また機会があればなみのやすらぎ交流館を使って活動ができればいいと思います。ありがとうございました。

4 景観を生かすアクティビティ事例集



4 LINES 4 POINTS

阿蘇の草原再生のヒントとなる、４つの線と４つの点

4　景観を生かすアクティビティ事例集

前章のフィールドワークとワークショップでは、阿蘇になじみのなかった学生達が、地域を訪れ、地元の方々にインタビューをすることを通して、阿蘇の景観のすばらしさ、その景観と人の生活との結びつきの尊さ、それらを維持するための、地域に関わる人々を増やすことの大切さを実感した様子を報告しました。そして、学生達のワークショップでは、そうした地域外の人々と、**地域や地域の景観との結びつきを創造することができ得るアクティビティ**として、どのようなものがあり得るのか、ということがいくつか提案されました。

そこで、本報告書では、こうした目的に関わるいくつかのアクティビティの事例を集め、以下に紹介することにしました。これらの事例は、いずれも地域環境を空間的な資源として展開されたレジャーや健康などの**現代的な社会的福祉**に関わるアクティビティです。いずれの事例も、自然景観や歴史的景観、あるいは一次産業に育まれた景観を資源として活かしながらも、そのアクティビティの内容は、必ずしもそれらの景観が育まれたもともとの目的（一次産業や城下町などの歴史的な目的）を第一義としている訳ではありません。しかし、そうした経緯で育まれてきた地域景観を大きな資源として見なして、そこに現代的にもとめられるアクティビティを重ね合わせることで、その景観の利用価値や存在意義が高められています。また、それだけでなく、その**利用をとおしてその景観や、それを擁する地域に対して関わりをもつ人々を増やす**ものとなっている場合があります。このような、利用者のリピートを前提とするアクティビティは、これまでの一次産業をベースとした景観の維持に加えて、より積極的な景観経営の仕組みを重ねていく効果をもっています。

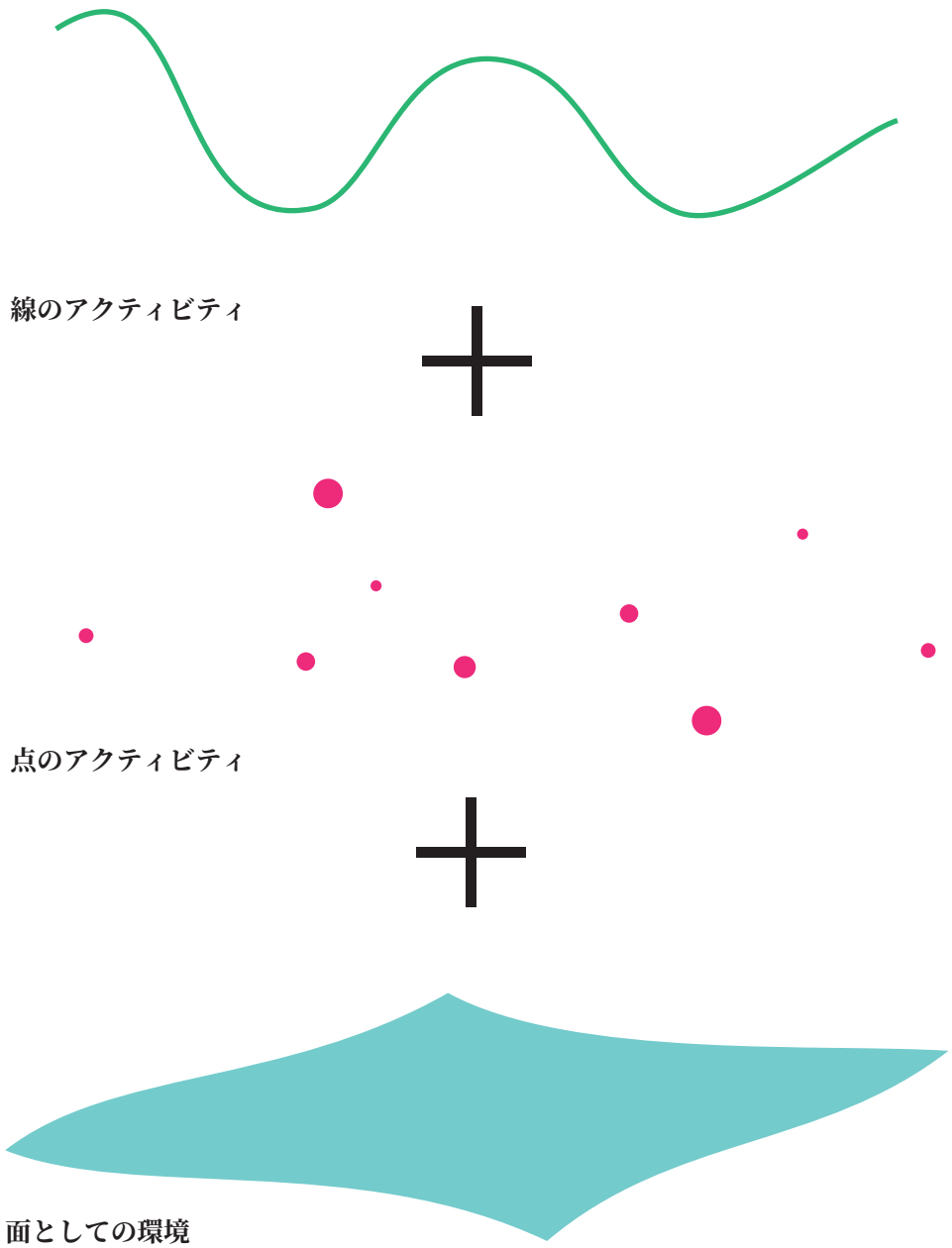
また、これらの事例に共通するもう一つの特徴は、その利用者が必ずしもその地域に住まう人々ではなく、景観資源を活かしたアクティビティのために遠隔地からあつまる人々であるということです。

現代社会の IT 技術の普及によって、こうした遠隔地の人々が、**特定のテーマに対する関心を通して結びあわさる場**を持つことは、ますます容易になっています（テーマ型コミュニティと言われます）。その一方で、核家族化や独居化が進み、都心居住者の比率や人口の流動性がかつてよりも増している現代においては、「田

舎」「ふるさと」と言えるような地域を持つ人口は当然のように減少しています。いくつかの事例においては、こうした現代の都心居住者にとって、田園的な景観と自らの個人的な生との関わりを持つことに対する潜在的な希求が存在し、事例において提供されているアクティビティが、そうしたニーズに応えている様子を読み取ることが出来ます。

阿蘇の景観は、元来、長い期間にわたる牧畜のための産業景観として成立し、維持されてきたものですが、冒頭の章でみたように、今やそのシステムを単独で維持することは困難な状況になってきています。この雄大な草原があって始めて提供できる現代的なニーズに即したアクティビティを阿蘇の各地で展開し、それぞれの空間の利用特性（点的、面的、線的）を活かして組み合わせることで、阿蘇の景観を総合的に活かし、維持する仕組みを構築することができる可能性があるのではないでしょうか。

以下では、広大な草原という面に重ねるアクティビティを、「**線**」「**点**」**という視点**で分けて紹介します。



事例１）イギリスのフットパス

イギリスには、公有地・私有地の別なく、地権者が存在する土地を公衆が通行する権利（public rights of way）が存在します。それは、市民誰もが、国土の優れた田園景観を味わって楽しむために通行することのできる道を確保しなければならない、という考え方に基づくものです。この考え方は 1920 年代から 1930 年代にかけて、貧困な工業労働者を中心に、せめてハイキングによって野外を楽しむ権利（パブリック・アクセス）を主張する運動を行うことを通して、法律で定められたものです。このころは、ユースホステル協会なども設立(1930年)され、ハイキングブームが盛り上がった時期でもありました。その結果、イギリスには、歩行者用の「フットパス」、乗馬も許される「ブライドル・ウェイ」、すべての交通手段が許される「バイウェイ」の３段階の「パブリック・パス」が、道路とは別に法律で定められ、市販の地図にも記載されています。

こうしたパブリック・パスは、国指定の自然景観の散策路であるナショナル・トレイルと一部重なりながら自然保護地や美しい牧場の景観を通り抜けます。そして、誰でもが楽しく国土の景観を楽しむことができるウォーキングやハイキングのルートを提供すると同時に、訪れた人々に護るべき田園景観や自然景観の価値を伝え、地域の観光も促進しています。牧場の土地の所有者であっても、この２ m 幅の道の通行権を制限することはできませんが、牧場から家畜が逃げ出したり、危険な動物が入り込むと良くないので、キッシング・ゲート（人間がすれ違うとキスをしそうになるゲート）と呼ばれる仕組みの門扉が付いていたりします。

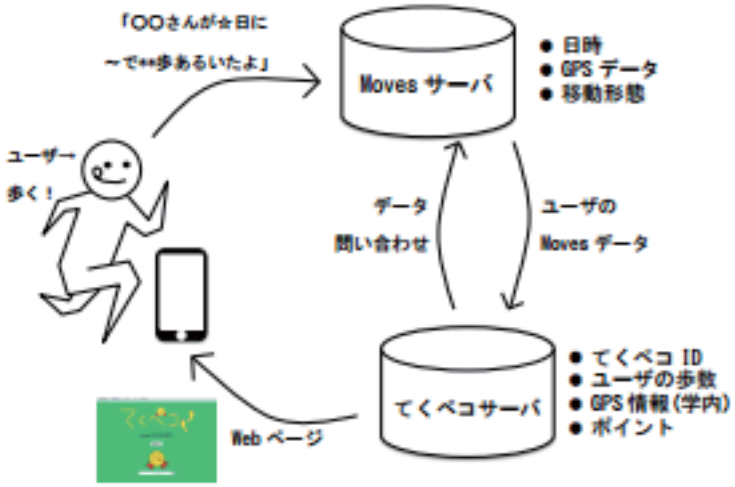
阿蘇の牧野の景観においても、このような仕組みを導入してより多くの人々にその価値を知ってもらうことで、新たなツーリズムを引き起こし、その収益で景観を護るという循環をひきおこす可能性を秘めていると言えるでしょう。

フットパスとナショナル・トレイルを示す標識

牧場を通り抜けるフットパスの入り口にあるキッシング・ゲート

事例２）てくペコ（ウォーキング）

立命館大学の野間らの研究チームはウォーキングによる健康づくりを促進するソーシャルシステムとして、「てくペコ」を開発しています。「てくペコ」では、参加者が歩いた距離をスマートフォンで記録し、その結果を複数人のチームで共有することで、お互いが励まし合いながら目標距離の完歩達成を目指します。運動をゲーム化し、またコミュニティで取り組めるようにすることで、運動習慣が身に付くと考えています。すでに立命館大学キャンパスや長浜市において実証試験をおこなっております。



「てくペコ」システム概要　出典：鈴木真生 江指未紗 若尾あすか 松村 耕平 野間春生、健康維持のための行動変容を働きかけるソーシャルシステムの開発

長浜における実証試験のポスター　出典：長浜市　ホームページ
（http://www.city.nagahama.shiga.jp/index.cfm/11,36559,c,html/36559/20140912-103021.pdf）

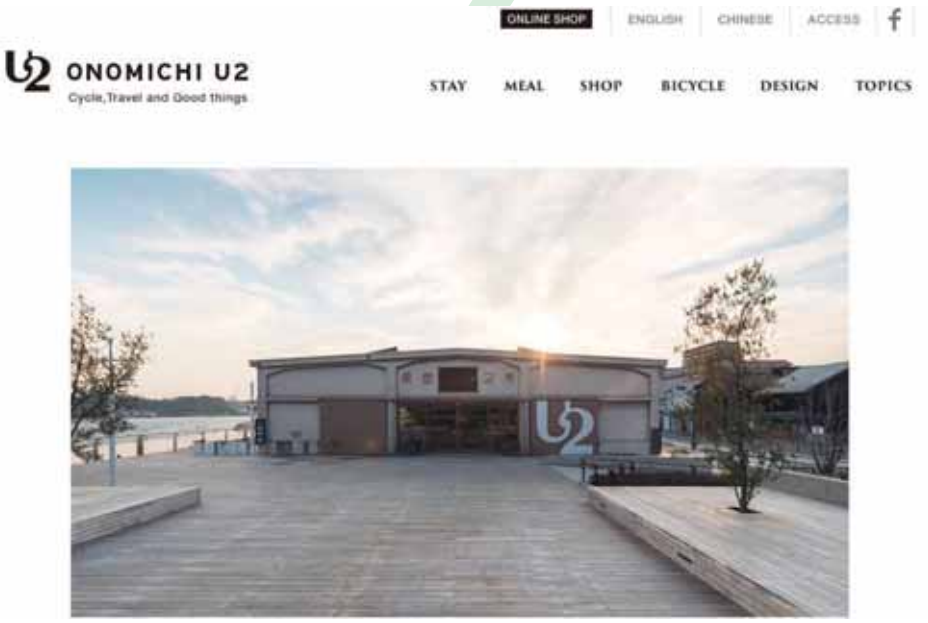
事例３）しまなみ街道（サイクリング）

瀬戸内海の島々を通って今治と尾道を結ぶ「しまなみ海道」はサイクリングで有名です。ここには「瀬戸内海横断自転車動」という 70km にわたるサイクリングロードが整備されています。各所にレンタサイクルも用意され、サイクリング上級者だけではなくビギナーにも対応しています。

しまなみ海道の一帯ではサイクリングを軸にしたまちづくりの試みが行われています。たとえば、「NPO 法人シクロツーリズムしまなみ」では「しまなみ人の日々の営みの中へ飛び込み、遊び、学ぶ新しい旅のスタイル「シクロツーリズム（自転車旅行）」プログラム」を提供しています。観光客と地域住民が交流し学習することをいかに可能にするかが、今度の観光にとって重要な観点になります。サイクリングはこの点でとても魅力的なアクティビティなのです。

自転車は単なるスポーツではなく、ライフスタイルやカルチャーとして愛好されるようになってきています。しまなみ海道の出発点でもある尾道では、サイクリストをターゲットとしたホテル・レストラン・ショップとして「ONOMICHI U2」がオープンしました。ホームページには「ここに暮らす価値を実際の生活からひも解き、暮らしの楽しみ方を発見・発信していきます」とあります。東京のコピーではなく地域から新しい独自の文化を発信していくことが重要になってきています。

出典：しまなみ海道サイクリング　ホームページ
（http://www.oideya.gr.jp/shimanami_cycling/）

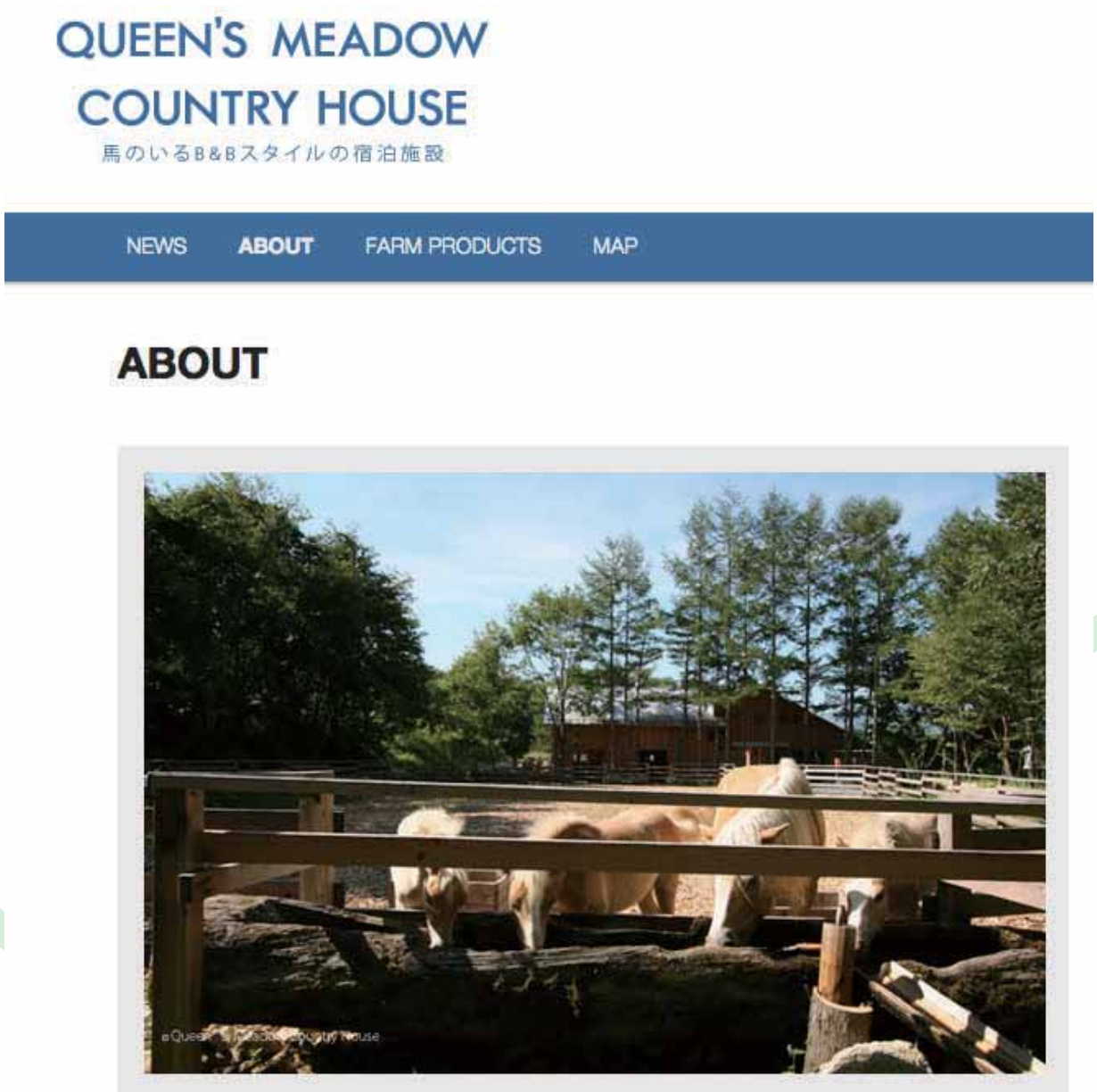


出典：ONOMICHI U2 ホームページ
（http://www.onomichi-u2.com/）

事例 4）クイーンズメドウ・カントリーハウス（乗馬）

岩手県・遠野のクイーンズメドウ・カントリーハウスは「馬のいる B&B スタイルの宿泊施設」です。馬との共存という独特の観点による地域再生の試みが評価され 2008 年度のグッドデザイン賞を受賞しています。

この施設を計画・運営しているランドスケープ・アーキテクトの田瀬理夫らは、「これからの地方の農的暮らしを支える基軸の一つは”馬”だろう」という考えのもとに、馬を飼うことを中心として地域を再生させようとしています。遠野だけではなく日本の多く地域では戦後までたくさんの馬が飼われており、農作業に用いたり、馬糞を堆肥として利用したりしていました。田瀬らはふたたび馬を飼うことを産業として成立させようとしています。「餌をあげたり放牧したり、世話をする仕事が毎日ある。それに従事することで若者が土地にとどまることができる。農業も有機化できる。」クイーンズメドウでは、約 6.5ha のエリアで、水田、畑、草地、林間放牧地、山林を再生活用しています。宿泊施設と牧場の運営だけでなく、馬糞を用いた有機農業を行ったり、地域の材木を製材から行って自力で施設を建てたりと、生態系や景観と産業を総体的に捉えて自律的な仕組みをつくろうとしているのです（参考：西村佳哲、ひとの居場所をつくる―ランドスケープ・デザイナー　田瀬理夫さんとの話をつうじて、筑摩書房、2013）。



出典：クイーンズメドウ　ホームページ（http://queensmeadow.info/about/）

事例 5）イギリスの自然葬地

事例１ではフットパスを紹介しましたが、これとも関連する事例として、「自然葬地」（Natural Burial Grounds）というものがあります。石碑ではなく樹木などを墓碑の代わりにするイギリス発祥の新しい墓地の形式です。ひとりひとりの埋葬料や管理料によって、樹林や牧草地の景観自体を美しく保ち、育てるという仕組みになっています。このような墓地の形式がイギリスで広がったのは 1990 年代からのことで、今では全国で 200 件ほどにその数が増えています。

より自分らしく、より素朴な形で愛するものに別れを惜しんでもらいたい。また、家族という伝統的な枠組みの中ではなく、より大きな自然の循環の中に帰っていくような葬送を選びたい、という人々の思いによって生まれ、広がっていったと言われています。また、そうした人々の思いに応えながら、従来の墓地よりも安価に管理ができることから、公営墓地などにも、多く取り入れられています。

様々な形式があり、牧場のような景観で、故人の名前を刻んだ小さな石を埋め込むものや、森の中で、彫刻した木杭や鳥の巣箱を墓碑にするもの、あるいは、新たに植える樹木を墓碑として、使用料を原資に育てる樹林自体を、大きなメモリアルと見なすものもあります。また、全体が公園のようなつくりになっていて、誰でも自由に散歩をしたり、チャペルの代わりに建てられたホールで毎月音楽会を行なったりして、地域の文化ホールのようになっているものもあります。

こうしたお墓の形式が広がっている背景には、多くの家族が離れ離れで暮らすようになった今、誰もお参りにこない、管理にも費用のかかる高価な石碑の墓地を購入するよりも、はるかに安価で、かつ、多くの人々が訪れ、育まれた景観が自然環境の保全に役立ち、また人の目を楽しませるということに対する、利用者の満足感もあるようです。

木杭の墓碑は、朽ちて消えてしまう仕組みになっています。

故人のメモリアルとして置かれた鳥の巣箱

阿蘇の牧野景観においても、その雄大な景観自体を大きなメモリアルとして眺められる場所を設け、牧柵の幾つかに目立たないように墓碑名を刻むという工夫もあり得るかもしれません（そのことを知らずに訪れる人々がいても、一向に構わないでしょう）。その景観に愛着を持つ人々を偲んで、ハイキングをしながらお墓まいりをすることで牧野の景観が守られるならば、素晴らしいことではないでしょうか。

イギリスの牧場を利用した自然葬地の事例

阿蘇の牧柵。このうちの幾つかに墓碑名が刻まれていたら、多くの人が利用したい自然葬地になるのではないでしょうか。

事例 6）吉村医院（出産）

愛知県岡崎市にある吉村医院は、医療技術に極力頼らず、お母さんの「産む力」を引き出す自然分娩に力を入れいている産婦人科です。医院の隣に築 300 年の古民家が移築されています。「昔懐かしい里山のような場所に妊婦さんが集い、薪割り、鋸挽き、雑巾がけなどの昔ながらの労働を体験します。」このことが「自然なお産に必要な、力強くしなやかな身体と心を養うきっかけ」になるといいます。こうして吉村医院でお産を経験したお母さんたちは「うぶやの会」というボランティアグループを運営しています。お産を共にすることがコミュニティを生み出しているのです。

事例 7）ふるさとウェディング

全日本ブライダル協会が推進する「ふるさとウェディング」は、景観、郷土料理、伝統工芸といった地域の魅力を生かした挙式スタイルです。ふるさとウェディングのアイデアを募集する「ふるさとウェディングコンクール」が開催され、これまでに島根県、群馬県などの組織が受賞しています。

群馬県昭和村の「畑 de ウエディング」は 2014 年度のふるさとウェディングコンクール総務大臣賞受賞者です。サポートするのは「H. O. W.（Happy Outdoor Wedding）」。彼らが目指すのは「新郎新婦がそれぞれの地域で、それぞれの結婚式を自ら楽しく作ることができる未来」です。「畑 de ウエディング」の新郎は開拓農家の三代目。畑をつかった会場や、地域の産物を用いた料理。地域住民が協力して作り上げた結婚式には各地から 480 人が集まりました。

出典：吉村医院 ホームページ
（http://www.ubushiro.jp/index.html）

出典 (右上写真共)：H. O. W. ホームページ
（http://happy-outdoor-wedding.com/stories/581/）

事例 8）木匠塾

日本全国の林間部のいくつかの場所で、大学の建築学生を中心とした、「木匠塾」の取り組みがなされています。具体例として「かしも木匠塾」では今年度で 20 周年を迎え全国から多くの大学生が訪れ、加子母地域全体を学びの場とする活動を行ってきました。具体的には、長期休暇を利用し、泊りがけで地場産材を用いて街の休憩所を制作したり、古民家の屋根を葺き替えるなど町の生活と学習の場がマッチングしています。

現在では学生たちが中心となり、大学・世代・地域、それぞれの関係をまたいだ学びの場「加子母る大学」の仕組みづくりの準備を進めるなど、地元の林業に携わる人との関わりから、コミュニティが拡大していき、伝統文化の伝承だけでなく、学生による町おこしが始まろうとしています。

加子母総合事務所 - kashimo branch office -
〒508-0421　岐阜県中津川市加子母3519番地2
電話：0573-79-2111

トップページ > 加子母総合事務所

加子母木匠塾

加子母木匠塾の最近のブログ記事

2/21（土）「加子母る大学　オープンキャンパス」域学連携事業報告会

(2015年2月16日 13:30 | カテゴリ:加子母木匠塾, 地域づくり | 個別ページ)

今年２０年目を迎えた「かしも木匠塾」をはじめ、今年度も全国から多くの大学生が訪れ、加子母地域全体を学びの場とする活動を行ってきました。
現在学生たちが中心となり、大学・世代・地域、それぞれの関係をまたいだ学びの場「加子母る大学」の仕組みづくりの準備を進めており、今回「加子母る大学オープンキャンパス」として、下記のとおり開催することになりました。
皆様、ぜひお誘いあわせのうえご来場ください。

【日時】　平成２７年２月２１日（土）　13：00～
【会場】　ふれあいのやかた かしも
　　〒508-0421岐阜県中津川市加子母3890-3

【こちらをクリックするとチラシがご覧いただけます】

【スケジュール】
13:00～17:00 ◇体験イベント
①炭づくり
②山仕事・薪割体験
③古民家改修コンペ
④歌舞伎舞台演出
⑤味噌づくり
⑥自然体験

19:00～21:00 ◇活動報告会
①加子母木匠塾
・金沢工業大学
・京都大学
・京都工芸繊維大学
・京都造形芸術大学
・東洋大学
・名城大学
・立命館大学
②名古屋工業大学
③名古屋外国語大学

出典：加子母総合事務所ホームページ
(http://www.city.nakatsugawa.gifu.jp/branch/kashimo/)

5 阿蘇かずらかご

???KM

はかりしれなく長いトレイルが、
阿蘇の草原を結びつけ、
地域住民と観光客を結びつけ、
産業・文化と景観を結びつける。

5　阿蘇かずらかご

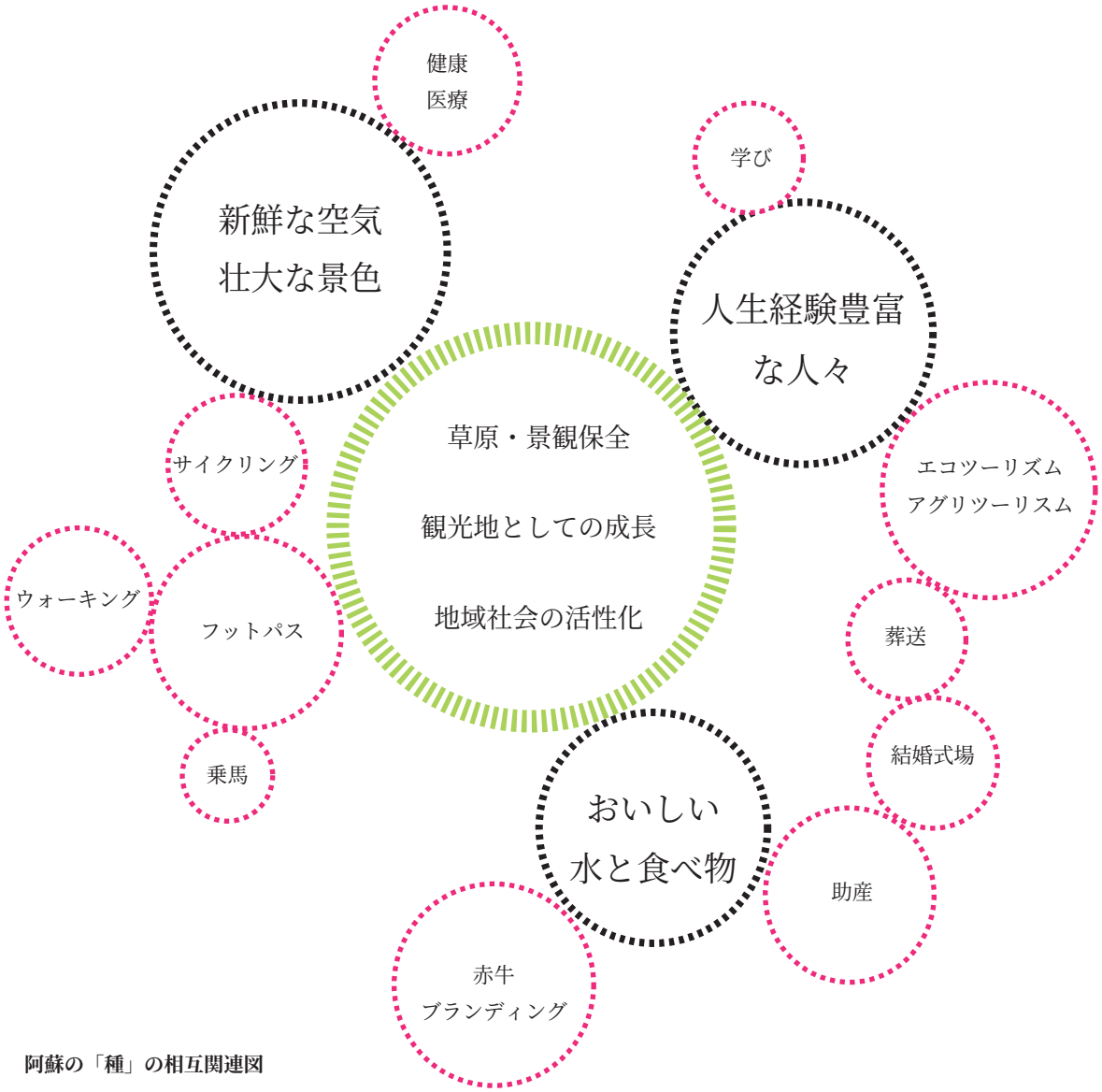
5-1) 阿蘇の可能性の「種」

４章までに、事前調査と学生たちによる阿蘇地域資源の調査とフィールドワークや地域の皆さんへのヒアリング、そして、それに基づく地域振興のアイデアに関するワークショップ、さらに、その成果に関連する事例の紹介を報告しました。

これらを通じて、阿蘇には、**産業や文化を通じた地域振興の可能性の「種」**が、数多く存在することがわかりました。右図は、これまでに出てきた「種」のキーワードを互いに関連付けて並べたものです。

阿蘇に地域固有のアイデンティティを与えているのは、いうまでもなく、草原です。阿蘇の草原は地域の産業や文化と密接に結びついて維持・保全されてきました。しかし、冒頭にも見たように、今、既存の産業構造のみでこの草原の景観を維持していくことが、困難になっています。

今後は、牧野単位での経営だけでなく、地域間の連携や、利用者の広域化を視野に入れて、右図に見られるような「種」をうまく取り入れ育てることが重要になると考えられます。そうして、草原の利用と結びついた新しい産業や文化を創出し、これまでの牧野の営みに重ね合わせ、相乗効果を生み出していくことが課題になります。



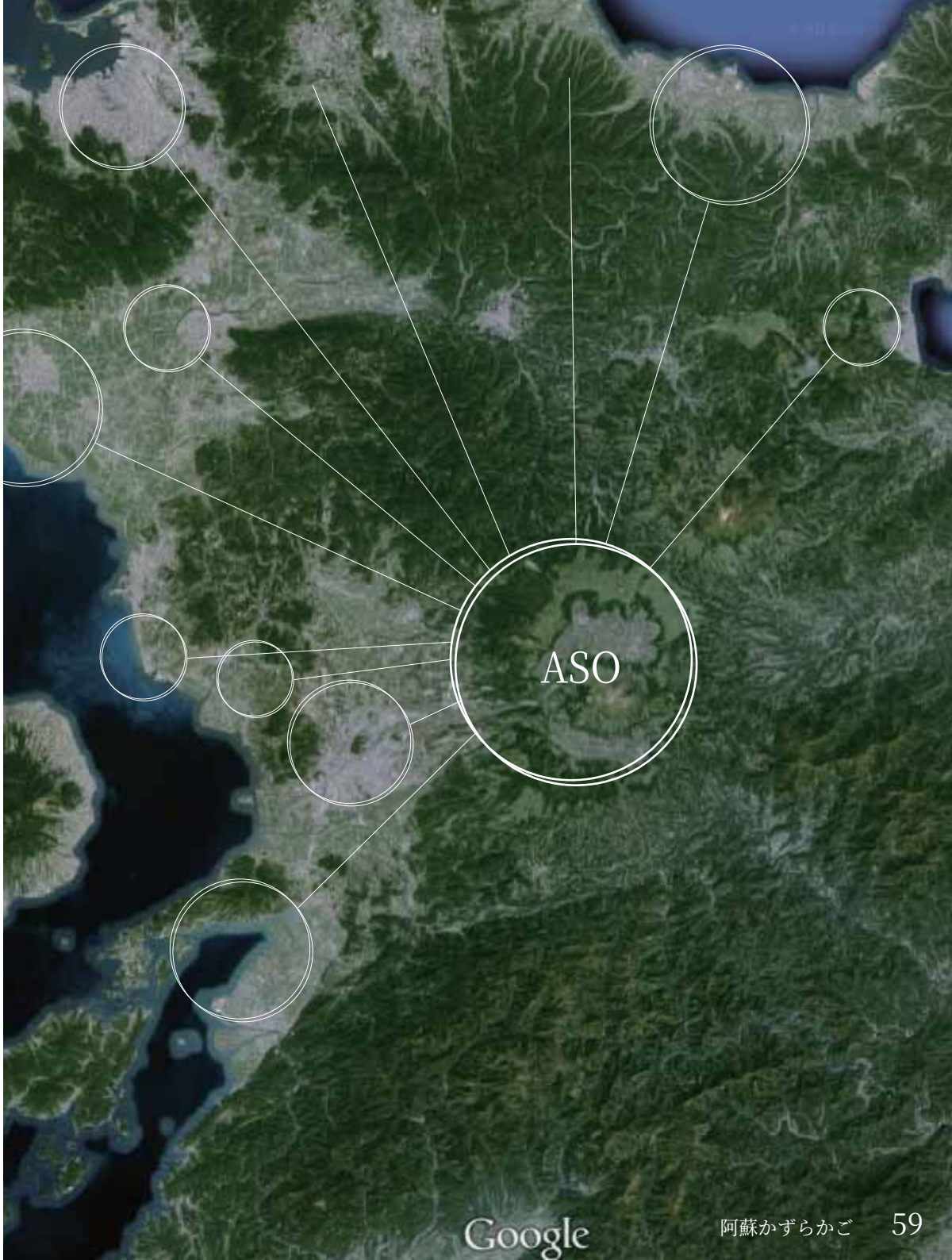
阿蘇の「種」の相互関連図

5-2) 産業・文化を「共につくる」

そこで、草原の維持・保全と結びついたような、従来の産業や文化のあり方を踏まえつつも、未来に向けた新しいビジョンを提示することが求められます。そのようなビジョンとして、次のようなことを考えます。**草原の利用と結びついたエコロジカルなライフスタイル**を地域住民が主体となって実践し、これを基盤とした観光を実現します。観光に参加する観光客は、地域住民の生活に参加することになります。地域住民の生活と観光客の体験は不可分に絡み合います。このようにして、**地域住民と観光客が、協働を通じて新しい産業・文化を作っていく**ことはできないでしょうか。

地域住民の生活と結びつかない観光は持続性を持ちません。「阿蘇地域振興デザインセンター中期計画」にあるように、「地域づくり型観光」こそを目指すべきです。その場所に住む人たちが魅力のある生活を送り、日常に即した**文化を発信**していくことが、観光の舞台としての阿蘇の魅力につながります。

観光客もまた単に外部からの「お客さん」にとどまらずに、地域住民の活動への参加を通じて阿蘇に自分の「**居場所**」としての帰属感を持つことができれば、阿蘇に継続的に通うようになるでしょう。特に現代において、都市住民は、自分の住む場所に帰属意識を持つのが難しい場合があります。彼らは自分たちの「居場所」を求めているのではないでしょうか。



「共につくる」阿蘇のイメージ図

5-3)「阿蘇かずらかご」の提案

阿蘇の可能性の「種」は、どのようにしたら成長し花を咲かせることができるでしょうか。

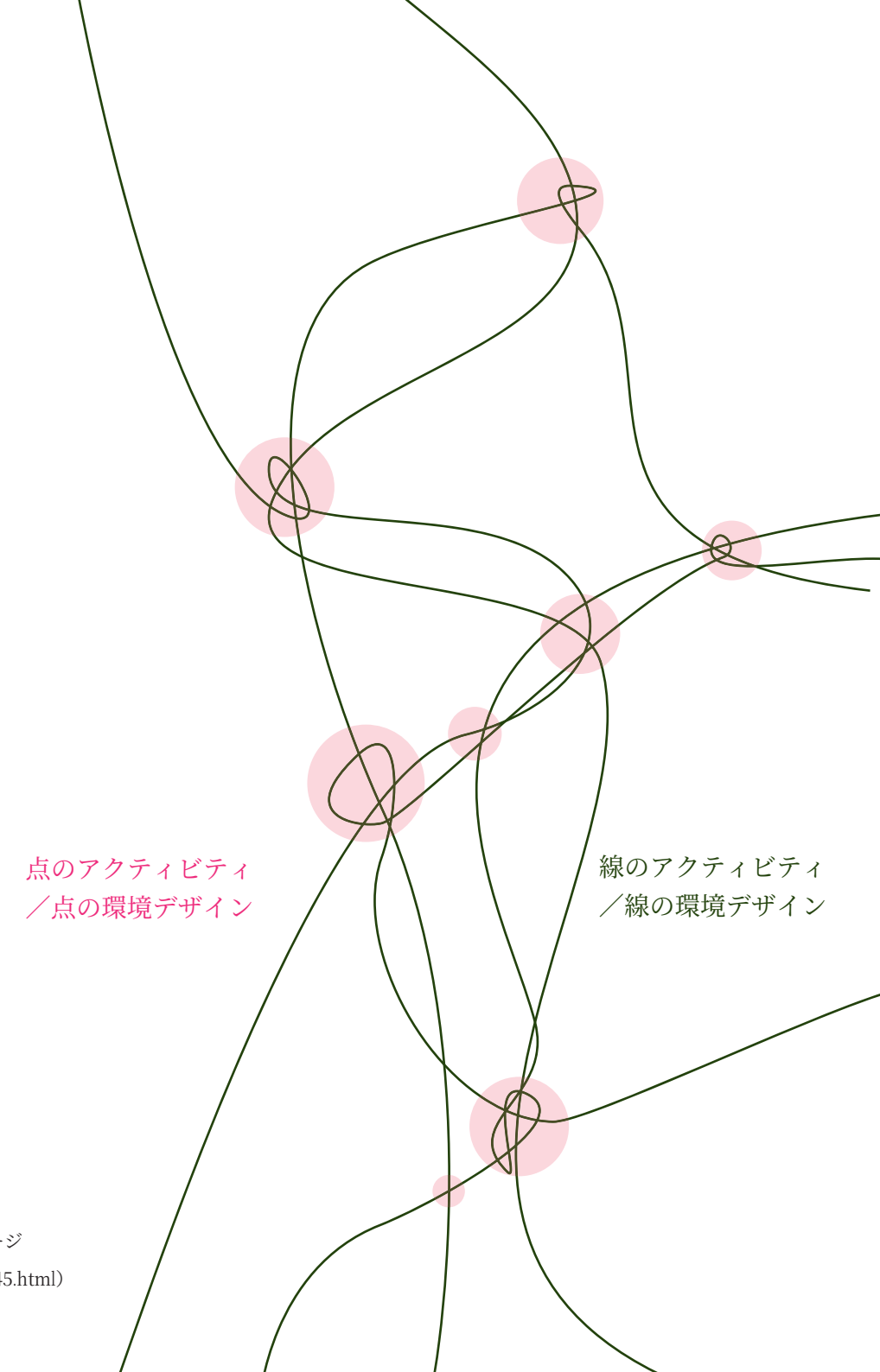
地域活動によってすでに生まれつつある幾多の「種」も、各地における「**点**」**的な活動**として存在するだけでは、それらが連携しあって**大きな「面」としての阿蘇の景観**を維持する力にならず、したがって「種」が花開いたことにはなりません。それぞれの「**点**」**をつなぐ「線」が介在し、阿蘇の草原という広大な「面」を織り上げる構造**が必要です。

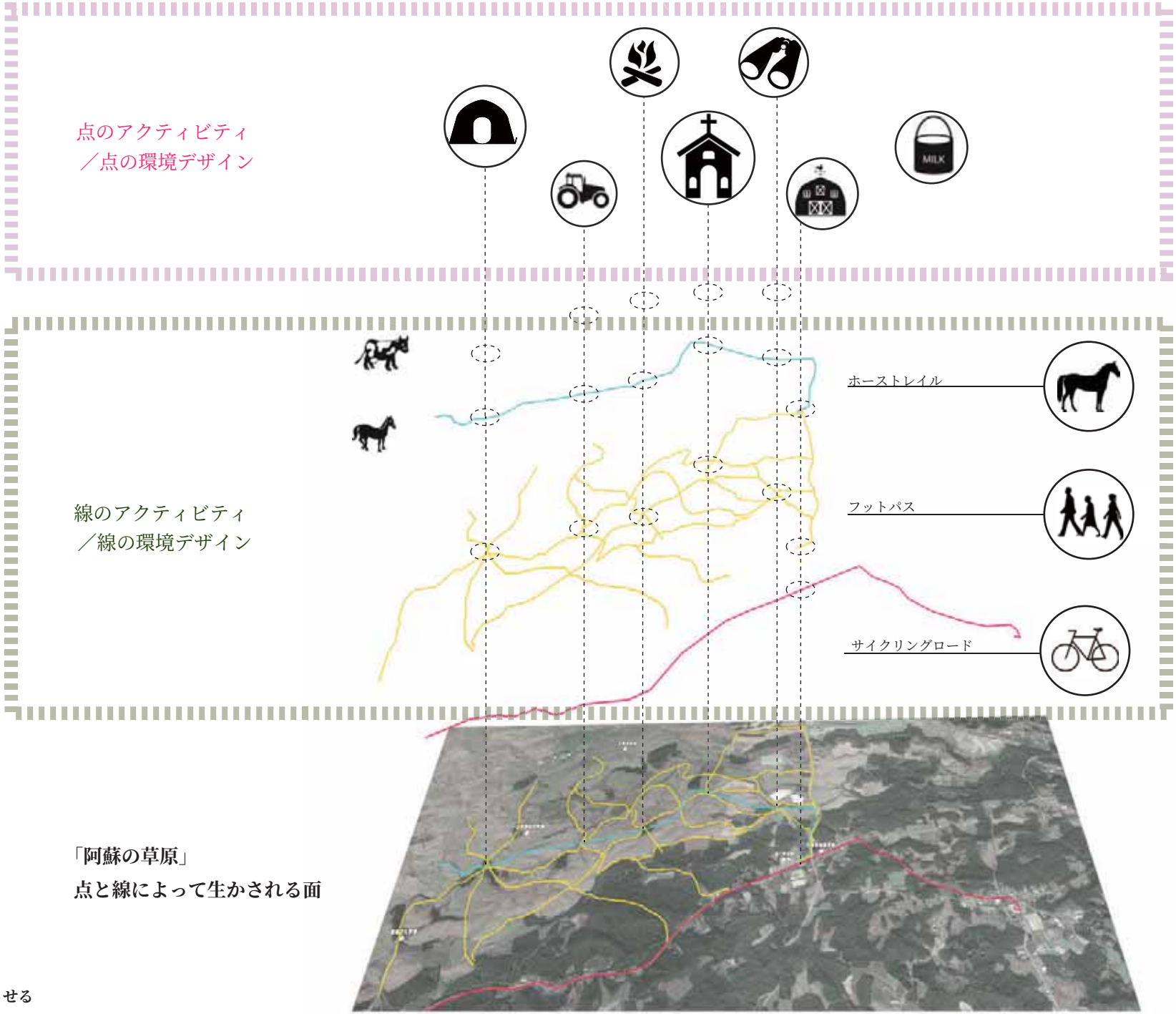
そこで、本報告では、そのように「線」と「点」が編み上げる美しい「面」のイメージとして阿蘇の伝統工芸であるかずら細工をとりあげ、「**阿蘇かずらかご**」を提案します。

具体的には、各地において草原景観を活用する「点」的なプログラムと、それらを中継地点として利用しながら結び合わせる、フットパス、サイクリングロード、ホーストレイルという「線」的なアクティビティによって、阿蘇の草原景観全体を経営していくという構造の提案です。

阿蘇では江戸時代より昭和２０年代まで、山野に自生するカズラを編んでつくるカゴなどのカズラ細工が盛んにつくられてきました。カズラの蔓が相互に絡み合って、有機的な構造を生み出します。

かずら細工のカゴ　出典：熊本県伝統工芸館ホームページ
（http://kumamoto-kougeikan.jp/kougeihin/cn31/cn29/pg545.html）





阿蘇の景観（「面」）を将来にわたって成立させる
「点」「線」による「かずらかご」の構造イメージ

5-3-1) 点のアクティビティ

以下では、「**線**」と「**点**」のそれぞれについて、「**アクティビティ**」（**ソフト面**）と、アクティビティの舞台を与える「**環境デザイン**」（**ハード面**）を提案します。最初に、点のアクティビティについて説明します。

・「学び」のツーリズム

観光のコンテンツとなる様々なイベントは、旅行という空間的な「線」のなかの「点」です。地域住民が観光のコンテンツになるとは思ってもいないことが、都市の住民にとっては、新鮮な楽しみとなることがあります。エコツーリズムやアグリツーリズムといった視点が大事ですが、**それがたんなる「消費」ではなく、自然や動物との関係を問い直す「学び」の機会となる**ときに、観光客と住民が共同して新しい価値を生み出すことが可能になります。

酪農：たとえば赤牛をただ食べるだけではなく、酪農体験を経た上で食べることができれば、動物の命について考える機会となるでしょう。
草刈りと野焼き：草原の維持のために草刈りや野焼きが必須です。牧野組合によって行われてきた、こうした草原保全活動に、観光客を呼び込む活動をより一層充実させていきます。

・「ライフイベント」のツーリズム

出産、結婚、死は、人生というライフイベントは、時間的な「線」の中の特異点です。こうした特異点を過ごす場所を阿蘇で用意します。阿蘇に住むのでなくても、そのような**ライフイベントを経験した場所は忘れられない「居場所」**になることでしょう。

出産：阿蘇には豊な自然、きれいな空気と水、栄養たっぷりの食があります。このような環境は出産に最適です。そこで全国から出産のために阿蘇に訪れることができる、そのようなプログラムを整備して行ってはどうでしょうか。とくに**自然分娩**は近年注目されていますが、敷居が高いのが現状です。出産前後を阿蘇で過ごしながら自然分娩のケアを行う、そのようなプログラムを提案します。

結婚：阿蘇の景観が結婚式にぴったりであることは言うまでもありません。草原の会場、赤牛の料理…。阿蘇でしかできない結婚式のプログラムがいろいろ考えられます。**結婚式を共に作ることが地域のコミュニティを育みます**。また特別な結婚式は、各地からの参加者にも阿蘇の印象を強く残します。

葬送：死を思ってこそ、よく生きることができます。今日、家族観の変化などに伴って、伝統的な墓地の形態ではない、新しい墓地のあり方が模索されています。樹木葬はその一例です。阿蘇に地縁がなかった人々でも、阿蘇に墓を持つことによって新しく**阿蘇への帰属意識**が生まれるでしょう。特にトレイルや後で述べるコミュニティ・カフェの整備と結びつけて、こうした施設の一部分を「墓」として整備することが考えられます。

→自然分娩
医療介入を極力排して母体の産む力を引き出すことに注力する分娩のありかた。田舎暮らしには本来の健康的な分娩をもたらす力があるようです。阿蘇が出産の場所となることは、生まれてくる赤ちゃんの「生まれ故郷」になることです。これを発展させれば、一定期間家族で滞在し、第二子の出産にも利用したり、誕生日のホームカミング的な訪問もあるような、第２の故郷プロジェクトが考えられます。

5-3-2) 点の環境デザイン

点の環境デザイン（ハード面）としては、「ASO コミュニティ・ステーション」を提案します。

・ASO コミュニティ・ステーション

すでに紹介した様々な点のアクティビティの活動拠点として、各地に「ASO コミュニティ・ステーション」を設けます。ここでの「コミュニティ」は、**地域の住民だけでなく、阿蘇の草原を享受し、利用し、その対価として維持する資金を投じるすべての利用者を含む、阿蘇の草原の保全育成に参加するコミュニティ**を意味しています。観光客や地域住民のための休憩所、地域の公民館であり、かつツーリズムの拠点にもなります。

「ステーション」と呼んでいるのは、これらの拠点が、次に提案する「線」のアクティビティであるホーストレイルや、サイクリングロード、フットパスといった各種トレイルの中継地点となって、各地で展開するプログラムを有機的に結びつける役割を果たすためです。

したがって、「ASO コミュニティ・ステーション」には、馬小屋、駐輪所が併設されます。そうして、地域住民の生活に根ざしたエコロジカルな循環を体験する機会を観光客に提供するためのバックヤードとなります。

「ASO コミュニティ・ステーション」は、地域に残された空家（特に古民家が好ましいでしょう）や、すでにコミュニティ・スペースとして機能している施設を改修して用います。

5-3-3) 線のアクティビティ

「線」についても「アクティビティ」（ソフト面）と「環境デザイン」（ハード面）に分けて説明します。線のアクティビティは以下のとおりです。

・ウォーキング

ウォーキングは、幅広い世代に親しまれているスポーツです。阿蘇においてはこれまでもウォーキングコースやフットパスが整備されてきており、また、ウォーキングイベントも開催されてきました。

・サイクリング

サイクリングは、近年人気の高まっているスポーツです。身体への負担が少なく、ウォーキングと同様に幅広い世代に親しまれています。

・乗馬

乗馬は現時点ではメジャーな活動ではないものの、今後、人気が高まる可能性を秘めています。阿蘇は千年前には馬牧であったという歴史を持っており、草千里は特に馬で有名です。全国各地で牧場内での乗馬体験が可能ですが、海外のブライドルウェイのように広域を乗馬で巡ることが可能な場所はあまりありません。阿蘇はそのような乗馬による広域の移動が可能になりうる数少ない日本の環境ではないでしょうか。

乗馬は単なるスポーツではなく、馬という動物が相手になるため、乗馬への関心はエコロジーへの関心へと結びつきます。馬は観光の焦点ともなるため、馬を軸にした町おこしの事例もあります。また日本や海外では馬との交流によるセラピーや、馬との交流を通じたリーダーシップ養成といった活動が始まっており、今後の展開が期待されます。

5-3-4) 線の環境デザイン

線の環境デザインでは、阿蘇地域に残された草原を、歩行者、自転車、乗馬のためのトレイルによって阿蘇全域に渡って結びつけます。これによって、様々な手段によって阿蘇地域を探索することが可能になります。このトレイルはツーリストのみならず、地域住民の生活道としても利用されます。この仕組みを、「**トレイルのメッシュワーク**」として提案します。

・トレイルのメッシュワーク

これまでのツーリズムは観光地という「点」を中心として考えられてきました。そこで、点を結ぶ移動（たとえばバスやタクシーによる移動）には積極的な価値は置かれてきませんでした。これに対して、本提案においては、「**線**」**に沿った連続的な体験**を、もう一つのツーリズムの中心に位置づけます。つまり、歩行、自転車、乗馬によって草原を巡る体験です。そして草原を通るトレイルを「線」の重なり合いとしてデザインします。このトレイルの線の重なり合いを「**トレイルのメッシュワーク**」と呼ぶことにします。

トレイル整備のための資金調達の方法として、トレイルの一部分（たとえば柵）への出資を全国から募って、その特典として出資者の名前をそのトレイルの部分に記すという方法が考えられます。この方法によって、出資者が自らの出資した阿蘇のトレイルを見るために旅行に訪れるという効果が望まれます。またトレイルの一部分を「墓」「納骨装備」として販売し、その利益によって整備することも考えられます。

→メッシュワーク

人類学者のティム・インゴルドの概念です。哲学者アンリ・ルフェーブルに由来するこの概念をインゴルドは点を結びつける線の「ネットワーク」と対置しています（参考:ティム・インゴルド、「ラインズ　線の文化史」、左右社）。ネットワークにおいては点に重きが置かれ、線は付随的である。一方メッシュワークにおいては線に重きが置かれ、逆に点は付随的なものと見なされます。観光地という点を結びつけていくツーリズムを「ネットワーク型」と呼ぶなら、線に沿って展開する経験を中心に置いたツーリズムは「メッシュワーク型」と呼ぶことができます。阿蘇の草原は、そのようなメッシュワーク型の観光に最適な環境なのです。

5-4) コミュニティを育てる

阿蘇の景観保全の主体、地域活性化の主体は、あくまでも阿蘇の地域住民であると考えます。しかし阿蘇の住民が、外部とは独立して活動するということではありません。観光客や我々のような外部の主体と協働して、**阿蘇の価値を創出**していくことが求められます。そのためには、単に計画を「作る」だけではなく、地域住民や地域住民と外部の主体との繋がりを「**育てる**」ことが重要です。ここで**ソーシャルキャピタル**という考え方が鍵になります。阿蘇の草原の維持を可能にしてきたのは、まさに牧野組合というソーシャルキャピタルでした。しかし今後の産業の変化の中で、ソーシャルキャピタルの形を、外部の人たちも巻き込むような、よりオープンなものへと更新していくことが求められています。

「デザインプロセス」で説明した、地域住民とのワークショップは単にデザインの手段となるだけではなく、地域住民や観光客のソーシャルキャピタルを発展させる手段となります。**阿蘇の将来ビジョンを共に議論し、それをもとに環境デザインを共に作り上げていくなかで、新しい阿蘇のビジョンという規範が共有され、住民のきずなが強まる**ことでしょう。

さらに、たとえば、阿蘇での体験をシェアできるSNSのようなプラットフォームを作ることによって、地域住民だけでなく、阿蘇に通うリピーター観光客のコミュニティ、そして地域住民とそうした観光客のコミュニティを生み出すことができるのと考えます。

5-5) デザインプロセス

・情報技術の利用

「阿蘇かずらかご」の環境デザインにおいては、立命館大学武田研究室で研究してきた**GPS、GIS、などをつかったデザイン手法**が適用できます。武田研究室では歩行者の位置情報をGPSによって獲得し、これをもとに空間特性を把握する手法を開発してきました。この手法によって、たとえば、阿蘇の観光客の移動パターンを分析することができます。あるいはどのような環境資源がどのように分布しているのかを分析することができます。こうした研究をもとに、歩行、自転車、乗馬、自動車、電車といったモビリティをどのように組わせて「トレイルのメッシュワーク」をデザインすべきかを検討することができます

→ソーシャルキャピタル
社会関係資本と訳され、人々や組織のネットワーク、相互の信頼、そして規範といったことを意味します。（参考：稲葉陽二（編）、「ソーシャルキャピタル「きずな」の科学とは何か」、ミネルヴァ書房）

・地域住民との対話を通したデザイン

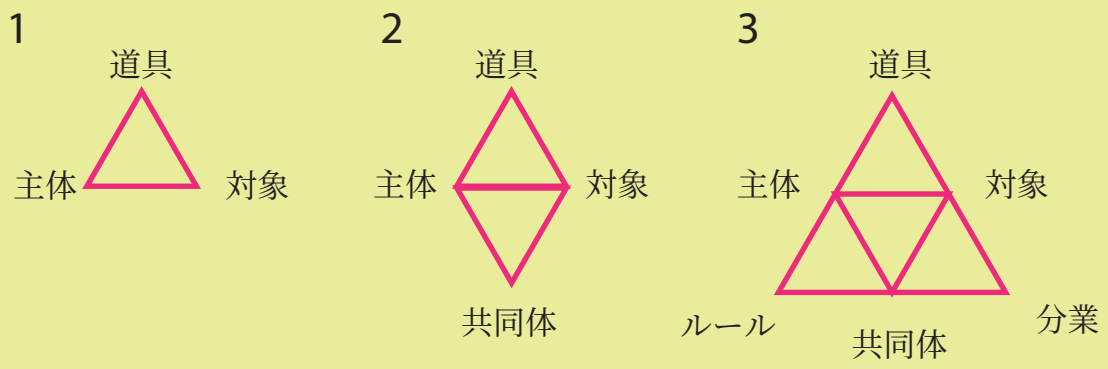
トレイルのデザインにあたっては**地域住民とのワークショップ**を行います。ワークショップを行うことによって、**自らの生活環境の設計者としての主体感、責任感が、地域の住民に育まれる**と考えます。GPS、GISを用いたデザインの可視化がワークショップにおける地域住民の積極的参与を促すと考えています。

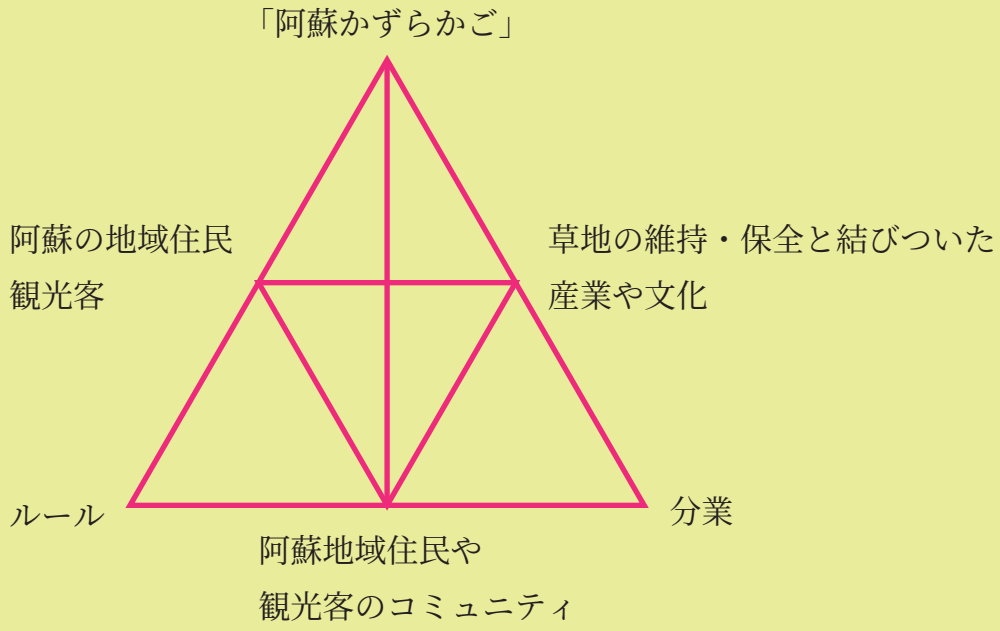
「活動理論」に基づく「阿蘇かずらかご」の説明

「阿蘇かずらかご」はY.エンゲストロームの「活動理論」を参考に構想されています。

人間（主体）は「対象」つまり目的にアプローチするために「道具」を使います（1）。たとえば狩りにおいて動物をしとめるために槍を使います。しかしそれだけではなく、「共同体」が主体と対象を結びつけます(2)。一人ではなくグループを組むことによって人間は大きな動物をしとめることができるようになりました。さらに主体と共同体の間を「ルール」が結びつけ、共同体と対象の間を「分業」が結びつけます（3）。つまり、共同体の維持のためには規則が必要になります。また主体がグループによって課題に対処するときに、分業が生まれます。

この枠組みで「阿蘇かずらかご」を考えます。主体となるのは「阿蘇の地域住民」であり、さらに「観光客」が加わります。「対象」あるいは目的となるのは「草地の維持・保全と結びついた産業や文化」です。そのための道具となるのが「阿蘇かずらかご」です。さらに「阿蘇かずらかご」は、コミュニティの創出にもかかわります。つまり、阿蘇の地域住民の間のコミュニティ、観光客の間のコミュニティ、そして地域住民と観光客のコミュニティといったものです。草原の維持や畜産、酪農といった作業を共に行うことを通じてこうしたコミュニティが形成されます。今回の提案では「ルール」や「分業」の提案は行っていませんが、今後検討するべきでしょう。（参考：ユーリア・エンゲストローム、「拡張による学習　活動理論からのアプローチ」、新曜社）





継続的な検討の必要性

本報告における提案は、いずれも今後の具体的な検討における可能的な方向性を示すものです。今後、地域の皆さんとの共同を行いながら議論を深め、実験的な試みを行う機会を得ることで、より具体的な継続的検討を行うことが重要と考えます。

- 謝辞 -

本業務における調査、検討のすべては、産山村、波野村の皆様、“阿蘇を歩こう“プロジェクト実行員会の皆様、なみの高原やすらぎ交流館の皆様、また調査にご協力をいただきましたすべての地域住民の皆様による、ご協力とご指導をいただきながら実施したものであり、それなくしてはここに報告する成果は達成されませんでした。記して深い感謝を申し上げます。

「阿蘇かずらかご」平成 26 年度 観光利用放牧地等整備調査業務報告書

発行年月日：平成２７年 3 月 20 日
業務委託者：公益財団法人 阿蘇地域振興デザインセンター
業務受託者：武田計画室 一級建築士事務所

報告書製作メンバー：
武田史朗 （武田計画室 代表、立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 准教授）
山口純 （立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構 専門研究員 ）
市川雅也（学生チームリーダー、立命館大学大学院理工学研究科）
赤池直樹、久保田貴大、正木享、佐藤建、Beizi Tian、Yinglu Zhang
（以上、立命館大学大学院理工学研究科）
梶野浩一、寺田穂、利見理紗、西尾美乃里、原田昌明、広田竜介、松井亮平、松崎篤洋、安田優
（以上、立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 ）